
蒼空への扉.MDP

とー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼空への扉・MDP

【Nコード】

N8839V

【作者名】

とー

【あらすじ】

くぁwせdrftgyふじこlp:~@:~」

この作品は『蒼空への扉・CPH』の続きとして書かせていただいております。まずは、前作をご覧になられることをお勧めいたします。

合宿の前の一時

つまり、そういうことだ。

その人物は、ため息をつきながら思った。明日から合宿なんだ。コンクールが終わってすぐ後に合宿。そう考えると、かなり疲れる。疲れる、と言うか、精神的疲労、とでも言えばいいのだろうか。

特に、こいつといると。

その人物は思いながら、向かいに座っている『そいつ』を見た。そいつは見た限り、人ではない。こいつを見て「ひとだひとだー」とか「ひとでひとでー」とか言う奴は、きつとどこか頭のタガが外れているんだ。その人物はそう思う。

そいつは赤い鱗を体中に持っていて、顔は鰐みたいの前に伸ばされていて、牙があつて爪が鋭くて、そして尻尾まであつて、蝙蝠のような翼まであつて、おまけに頭にはちょこんと、小さな角が生えている。こういう生き物を、その人物はこう呼ばれていることを知っていた。

ドラゴン、と。

「東海林、このラーメンイマイチじゃ、今度は別のを買っんじやぞ」
そして、その赤いドラゴンが、その人物、東海林に言った。しかも赤いドラゴンは、今、ラーメンを食べている。と言うか、こいつはいつもラーメンを食べている。

「おい、赤龍…、それはお前がほしって言ったラーメンだろ。俺はやめた方がいいって何回も言ったのに、お前聞かなかったから…」
東海林がその赤いドラゴン、赤龍に言った。

赤龍はそれを聞くと、顔を上げる。そして東海林に、言い訳をするように言った。

「仕方がなかるう、このラーメン、見た限りとてもウマソウだったんじゃからな」

聞いた東海林は、そのラーメンに目を寄せる。そして少しばかり

目を細める。うーん…。

「どこが？」

東海林は赤龍に、思わずそう聞いた。聞いた赤龍は、うむ…、とか小さく言ってみる。聞いた東海林は、そのまま赤龍にこう言い続ける。

「お前、本当にそれがうまそうに見えたのか？本当に、そのエキゾチックでなんともいえない紫色をしたラーメンが、本当にウマソウだと思ったのか？」

東海林は問いただした。

赤龍は、少しばかり目を潤ませる。そして、ラーメンの方に顔を寄せる。

「どうせ、どうせ東海林はそうじゃ。赤龍のことなんて、赤龍のことなんて…」

東海林は聞くと、赤龍に言った。

「おい、勝手に被害妄想を膨らませるな。こっちまで被害が来る」
聞いた赤龍は、う…うむ…とか言いながら、顔を上げた。そして東海林の方に視線を向ける。東海林はまっすぐとした視線を、赤龍に向けている。

「…、はあ…」

東海林は思わずため息をついた。

そして赤龍の、お咎めが入る。

「東海林、ため息はするでないぞ」

聞いた東海林は、すぐに赤龍へと反論する。

「お前、さっきの台詞を吐いとして、よくそんな台詞が出るよな」
聞いた赤龍は、全くの無自覚、と言わんばかりの表情をする。全く、何なんだこいつは。東海林はいつも通りのことを思う。

「全く…、それじゃあもつと、普通のラーメンを食べるか？もつと見た目も黄色っぽくて、ノーマルなラーメンをよ」

聞いた赤龍は、いつの間にか東海林に飛びついてきてる体勢になっている。

「本当か？東海林は、そんなに心が広がったのか？」

なんとなく、今の台詞にいら立ちを覚えた東海林だった。

聞いた東海林は、赤龍に言った。

「やっぱやーめた」

聞いた赤龍は、どんよりするか、とも思ったが、それは東海林のただの勝手な憶測だった。赤龍は、

「東海林！赤龍はこんな紫色でエキゾチックなラーメンを食べに来るために人の世に下りてきたわけではないのじゃ！じゃから、もっとうまいラーメンを出すのじゃ！」

東海林をゆすり始めた。

もう命令口調になってないか？

東海林は思いながら、面倒くさい気持ちでいっぱいになる。しかし、はつきり言って赤龍に何を言っても、今の赤龍には全く何も通用しないだろう。東海林の思考は、そこまで落ちたものではなかった。

「…、分かった分かった」

東海林は仕方がなく、そう言った。そして聞いた赤龍は、ぱっと明るい顔になる。東海林は暗い顔になる。

「東海林！いつも赤龍のためにラーメンを分けてくれて、感謝するぞ！」

東海林は小さく呟いた。

「感謝してるんだったら、俺から離れてくれないか？」

はつきり言って、気持ち悪い。

さすがにそこまでは言わなかったが、これは普通の人間同士でも気持ちが悪い。いや、普通の人間同士の方が、もっと気持ち悪いかもしれないな。東海林は思った。

東海林は、赤龍が自分から離れるのを見て、すぐに椅子から立ち上がる。そして新しいラーメンを取り出すと、それを赤龍の方に手渡した。

「はい」

と言つて。

聞いた赤龍は、ラーメンのビニールをはがして、すぐにお湯を注ぎ始める。そして楽しそうに、ラーメンが出来上がるまでを待っている。これだけなら、ただほほえましいだけなんだけどな。東海林は思った。

東海林は見ると、その紫色でエキゾチックなラーメンを取った。

「うむ？食べるのか？」

赤龍は聞いた。

「こんなもんを俺が食うと思うか？龍の胃袋でも入らなかったもんを」

聞いた赤龍は、そのラーメンに視線を移す。うーむ、と何かを考える。東海林はじろじろ見られるのが、はっきり言つて好きではない。

「そうじゃなー、胃袋は入ったぞ？ただその後に、嗚咽が走つただけじゃ」

東海林はすぐに、赤龍の言葉を要約する。

「そう言うのを、食べられないものつて言うんだ」

東海林は言つと、台所の方に行つて、そのラーメンをシンクに流し始める。これ、もしかして金属溶かしたりしないよな？

そして、すぐにカップの中は空になった。東海林はすぐにシンクの中に水を流して、そのカップを洗い流す。すぐにそのカップはごみ箱行き。

東海林は戻る。そして、はあ、とか思う。赤龍は楽しそうにラーメンを食べている。東海林はと言つと、昨日女子寮からわざわざお裾分けしてもらつたパスタを食べたのに、だ。これは雲泥の差だと思おう。でも、まあいいか、と東海林はなんとなく思った。

赤龍は、そもそも見た目の通り龍だ。ドラゴンだ。つまり幻獣、幻の生き物。そう呼ばれるだけはあつて、いままで赤龍とかかわつてきて、東海林は、はっきり言つて迷惑な非現実的な場面とよく出くわしたことがあつた。例えば、赤龍を悪為すものとして成敗しよ

うとする奴らが現れたりして、他には、とち狂った奴が襲ってきたりして、楽器を武器にする奴らまで現れて、という惨劇まみれだった。でも、と東海林は思う。赤龍のおかげと言えなくもない場面も、数回あったりする。だから東海林は、特に何も思わない。

東海林、寺山てらやま 東海林は吹奏楽部員で、バスクラリネット（以下、バスクラ）を吹いていて、天野あまのした下学園中学高等学校にいる中三の男子生徒だ。吹奏楽部にはこの前入部したばかりで、まだバスクラの腕はあまり奮わない。赤龍を見る事が出来る器の一人で、東海林の外にも、東海林の友人（と恋人）に四人、器がいることを知っている。他にも、龍が術師とか言う奴にも見えることを知っている。だが、東海林はこんなことも知っている。普通の人間は、龍に干渉することは出来ない。つまり、声を聞く事が出来ない。だからこそ、赤龍には東海林の手が必要なのだ。

東海林は赤龍の方に視線を向ける。赤龍は東海林に聞く。

「さっきのあのラーメン、金属溶かしたか？」

聞いた東海林は、「もしそうなら、俺は寮から追い出されるな」とか言ってみる。赤龍は聞くと、「それは困るの、東海林が寮から追い出されたら、赤龍にも住む場所がなくなってしまう」とか言ってみる。

「まあ、よくないか」

東海林は赤龍に言う。

ピピピピ

と、タイマーが鳴る。

「おー！ やつとできたぞ、流石に五分待った甲斐を、見せてくれ！」
赤龍は笑いながらそう言った。そしてそのラーメンのふたを開けると、そこには黄色い、ウマソウな麺が漂っていた。においまで、インスタントとは思えない。東海林は思いながら、なんとなくうらやましくなってくる。

「それじゃあ、改めて、いったただつきまーす！」

でもまあ、いっか。東海林は思った。

赤龍は、楽しそうだ。そんな赤龍を見るのは、東海林は、嫌いで
はなかった。

ペット同伴のカードゲーム

朝の集合はいつもより数段早い。合宿の定番の出来事だとは思いますが、それ以上に、東海林にはつらいものがあつた。

集合は七時半。

現時刻、七時二十五分。

そして東海林は、やっと支度を終わらせたところだった。ここからバスに乗って、電車に乗っていくとなるとまず間に合わない。まあ間に合わせるが。

東海林は、のんきに朝食である『栄養満点ゼリー』を飲んでいる赤龍の方に視線を向ける。赤龍は楽しそうに、朝のテレビを見つめている。赤龍には、危機感と言うものが足りない。東海林は思う。

「おい赤龍！」

東海林は赤龍に言う。それを聞いた赤龍は、東海林の方に視線を向ける。栄養満点ゼリーを吸いながら「うむ？」とか言ってくる。

東海林は赤龍の方に近寄りながら、こう言った。

「おい、そろそろいかないとまずいぞ」

聞いた赤龍は、テレビの端の方に視線を向ける。時間は今、七時二十六分になつたばかりだ。

「……？まだ十分に時間があるのではないのか？」

赤龍は言った。聞いた東海林は、赤龍に言った。

「あんな、お前、今日何時集合か分かつてんのか？」

東海林は赤龍に言った。

赤龍は、テレビから目を離そうとしない。テレビには『今日のトピックをまるまる収録！』しかも何故かビックリマークがななめ。

「八時、半じゃろ？」

赤龍は言う。東海林はこつこつこのを、ふざけたことと言つんだと思つ。

それを聞いた東海林は、赤龍に言った。

「違う、赤龍。今日の集合は八時半じゃない、七時半だ。」

聞いた赤龍は、再びテレビ画面の端の方に視線を向ける。そこにはデジタルの時計が表示されている。

『7:28』

思いつきり、そう表示されている。

「あきらめるのじゃ、東海林。今年の合宿は、なしじゃ」

東海林は赤龍の頭を殴ろうか殴るまいか、少しばかり困った。

そして、結果的に殴らないことを決めた。仕方がなく東海林は、赤龍にこう言ってみる。

「それを可能にするのがお前だ」

東海林は言った。

聞いた赤龍は、顔を東海林の方に少しばかり向ける。東海林は赤龍の方に、目をまっすぐと向けている。

東海林は赤龍に言った。

「だから、俺のために飛んでくれ！赤龍！」

いつものように、だが、いつものようにゆったりと飛んでいては、二分でつくわけがない。昨日合宿の荷物を詰めていたのに、それでは昨日の努力が無駄になってしまう。

赤龍はそれを聞くと、「うーむ…」と面倒くさそうに言った。

『7:29』

時間は無慈悲だった。

「仕方がないの」

赤龍は言って、面倒くさそうに立ち上がった。東海林の顔が、ぱつと明るくなった。

赤龍はベランダの方に出る。そして赤龍は、ベランダの床に四肢を突けて、大きな翼を空に広げる。東海林はトランクを背負って、赤龍に飛び乗る。炎天下だが、もうそんなこと言っではいられない。「む…、今日はぜひふんと重いの…」

赤龍は東海林に言った。聞いた東海林は、「仕方ないだろ」と赤

龍に言い返す。

「まあ、そうかの」

時間は、あと一分で集合時間。

今はまだ寮。ふつう間に合わない。だが、赤龍がそれを可能にする。

東海林は赤龍の肩を、少しだけ強く握った。

「いいぜ、赤龍」

聞いた赤龍は、東海林に吐き捨てるように言った。

「荷物を落とすでないぞ！」

瞬間、

いつもより五倍くらい速い、赤龍の飛行が始まった。

空気抵抗、東海林は赤龍に慣れていたためか、対処は何とかできた。ただ荷物が重いけれど。

風を切る甲高い音が、東海林の耳の奥にまで染み渡っていく。景色が、引き伸ばされるくらい速い。これって、下手したら音速超えられるんじゃないか？

そんなことを考えていたら、もう目の前は学校のエントランスの近く。

「着いた！」

東海林は大声を出すと、赤龍は学校のエントランスの死角に降り立った。東海林は誰も見ていないことを心から願いながら、エントランスの方に走って行った。

第一声だった。

「遅い、東海林君。減点」

それは、吹奏楽部の顧問の先生の、清原先生きよはらの言葉だった。聞いた東海林は、仕方がなさそうに頭を下げた。

「す、すみません……」

部員は東海林の頭下げを見て、すこしばかり笑っている。東海林はそれを聞くと、なんだか顔が赤く火照ってくる。

東海林は勘違いをしていたのだ。

七時半は集合時間ではなかった。出発時間だった。実際の集合時間、七時。

どっちみち遅刻だった、と言うことだろうか。東海林は考えて、少しばかり空しくなってきた。はあ…。

「まあ、丁度バスが来たところだし、もう大きな楽器は積んであるからよかったけど、今度からは遅刻はしないように」

清原先生は、どこまで行っても先生で、どこまで行っても正論だった。それが東海林には、もどかしかった。

「…はい」

東海林の声のトーンが低かった。

清原先生が「もう列に並びなさい」とか東海林に言う。聞いた東海林は、なんとなく気持ちが悪みながら戻って行った。

戻った先にいたのが、青い龍。

「東海林ってなんでそんなに寝坊魔なの？」

そう聞いてきたのが、雄大ゆうだいだった。それを聞いた東海林は、面倒くさそうな視線を向ける。

雄大、沖田おきた 雄大ゆうだいは、この学校の吹奏楽部の、バスーンを言うマインナーな楽器を吹いている。しかもバスーンを持っているところが妙に気障な気がしなくもない。そして、雄大は器の一人である。

「…、」

どこまでも沈黙を保っている、この青い龍の。

「俺と青龍せいりゆうだつて起きられたのに」

聞いた東海林は、目を細める。青龍は目をつぶりながら腕を組んでいる。何かを考えて逸るようにも見えなくはないし、何も考えていないようにも見えなくはない。もしかしたら、立ちながら眠っているのかも。東海林は青龍を見て思った。

「俺はお前らとは違うんだよ」

そして、それに一番加担したのは赤龍だったりする。

「そうじゃ、赤龍は青龍とは違って、暑がりなんじゃ」

は？と言う一瞬の思考が、東海林の脳裏を横切った。

東海林は赤龍の方に視線を向ける。そして、面倒くさそうにこう言った。

「お前…、そこ強調するところじゃない」

赤龍は、どこまでも真つ直ぐとした視線をしている。どこまでもまっすぐで、逆に困ってしまう。

「…、」

そして、一度青龍が頷いたように見えた。頷いたように見えただけで、もしかしたら一度頭をコクリとただけなのかもしれない。

そして、面倒くさいのがもう一人、と言うかもう一匹。

「でも僕は、暑がりでも寒がりでもありませんよ？」

それは、雄大の前にいる、緑色の龍から聞こえた言葉だった。東海林は、勿論この緑色の龍も知っていた。

「…、お前まで話に加担するつもりなのか、じよんりゆう緑龍」

東海林は思わず呟いた。それを聞いた緑龍は、「へ？」と言うような、そんな疑問気な表情を、東海林の方へと向けている。それを見た東海林は、逆に困ってしまう。

「緑龍」

と、声が聞こえてくる。それは、学校にいる器の声。つまり、龍が見える奴。

「へ？」

と緑龍は言った。

その前にいる人物が、緑龍の視線を強引に、前の方に向けた。前の方に向けると、緑龍は目をぱちぱちとさせる。

「お前は前を向いて、先生の言葉を聞いている」

その声は、妙に訛った口調で、しかもどこか違和感のあるような声だ。一階聞いたら、きつと忘れられないだろう。

「え、でも大介、だいすけあっちの方で、暑がりとか寒がりとか…」

とか何かを言っている。

大介、かさこ風戸 大介は、この学校の吹奏楽部で、ピッコロとか言う

楽器をやっている。マイナーとまでは言わないが、雄大くらいうまいかと聞かれたら、それは微妙なところだと東海林は思う。学校でも有数の変人で、しかも器。緑龍と一緒に暮らしている。

「お前ら、ちよっと黙ってる」

そして、少しばかり声のトーンが低い声が、大介の隣くらいで聞こえてくる。その声は、東海林を含めて、龍らにも言われた言葉だ。つまり、そう言うことだ。

「…、」

緑龍は、何気なくまた、一度頷いたようにも見えなくはない。しかし相変わらず、目を固くつぶっているのは確かだ。

「え、でも健一、俺はそんなに…」

健一、和山 健一は器ではない。術師だ。トランペットで様々なことをするという、聞いたただけだと芸人にも聞こえなくはないものだ。

和山はものすごい勢いで、大介を睨んでくる。大介は一瞬ひるむ。緑龍までひるんでくる。

「…いいから、黙れ」

声が、ヤバイ…。

聞いていて、東海林は思わず声の出し方を一瞬忘れる。赤龍も、少しばかりふるえている。

「こ、怖い…」

そして、睥睨。

！

赤龍は思わず、和山から視線を逸らした。「せ、赤龍は知らないみたいなことが、赤龍の頭の中で他動的に渦巻いていく。

「黙れ…」

怖い。

赤龍は、声の出し方を一瞬忘れたようだった。

「でもさ、俺も寒がりなんだよねー青龍」

あんなことがあって、平然と話してられるのは、雄大くらいな

ものだ。東海林は見ながら、本気でそう思った。

「…、」

そしてまた、青龍が一度、コクリと、眠っているのかそうでないのかよく分からない行動をとる。青龍はもしかしたら、眠っているのかもしれないし、本当はそう見えるだけで、何かを考えているだけなのかもしれない。

とりあえず雄大は普通ではない。それが改めて、よく分かった。

和山はその雄大の声を聞くと、小さくため息をついた。はあ…。

さすがの赤龍も、今の和山に、そのため息を言い咎めることは出来ない。それが、いわゆる普通の受け取り方と言うものだ。東海林は思った。

「人の理解を越えた奴と話は出来ん」

和山は、雄大にそう言った。

東海林は、なんとなく納得した。そして、いろいろな意味ですごくとも思う。雄大は、あの少し怖いバージョンの和山でさえ、コンタクトをあきらめるような、そんな人の理解を越えた人物なのだ。

「…、」

そして、青龍が二回、コクリ、コクリと頭を上下させたのは、きつと偶然ではない。東海林は見ていて思った。

清原先生の声が、徐々に東海林の耳に届いた。

「バス内は自由席です。でも、乗るバスは、学年ごとに分かれてください。いいですか？」

それを聞いた吹奏楽部員のほちよんどが、『はい』と声を張り上げる。勿論その中に、東海林が入っているわけではない。雄大も入っていない。

「それじゃあ、各自、バスに移動」

清原先生が、そう声を張り上げた。

つまり、バス内は自由席だということだ。東海林はバスの中に乗っていると、なんとなくではあるが、空気が違うことを実感した。

籠って淀んだ、と言うか、どこか蒸し暑いというような。

東海林はあたりを見回して、とりあえず後ろの方の窓際の席に座ってみる。

赤龍が、東海林に声を出した。

「しょ、東海林、前には座らんのか？」

あ、そうだ、こいつがるんだ。

東海林はそう思いながら、その声のした隣の方に視線を向ける。そこにいるのは、赤龍。東海林は、確か赤龍が乗り物に弱いということを知っていた。

「あ、そう言えばお前、ガタガタ揺れる奴、だめだったな」

東海林は、まるで他人事だった。どんどんと、バスの中に人が乗ってくる。必然的に、東海林の周りに人が集まってくる。

「だめじゃよ！」

赤龍は声を張り上げる。しかし赤龍の声は、器と術師にしか聞こえない。つまり、殆どの奴には聞こえない、と言うことだ。

東海林はそれを聞くと、前の座席についているポケットを見た。その中に、いろいろなものが入っていることを確認する。

「大丈夫だ、赤龍。ちゃんとエチケット袋がある」

聞いた赤龍は、東海林に言った。

「そう言う問題ではあらん！」

東海林はそれを聞くと、ははは、と笑ってみる。赤龍は困り顔だ。そんな顔を見るのも、東海林は嫌いではなかった。

その時だ。

その時、先輩の一人である、バリトンサックスの曾等先輩ソウヘが、バスの中に乗ってきた。あれ？東海林は思う。このバスって、中学じやなかったっけ？

曾等先輩は、小さな袋の中に入った何かを、東海林たちに見せる。

「この中で、酔いやすいやつとかいるか？」

聞いた赤龍の顔が、ぱつと明るくなった。

東海林は、何なんだかよく分からなくなってくる。

「もしいたら、酔い止め渡すんだけど」

それを聞いた瞬間、赤龍が手を上げる。

「赤龍じゃ！赤龍が酔いやすいぞ！！」

赤龍は注目されない。あえて言うなら、雄大と大介と和山あたりだろうか。そしてもう一り。

「はい」

手を挙げたのは、東海林の前の席だった。つまり、エチケット袋が入った椅子。

「あれ、香奈さん？」

東海林は、その声の主の方を見ながら、思わずそう答えた。香奈さんって、乗り物に酔いやすいんだっけ？東海林は考える。そんなことはなかったような、そんな気がする。

「あ、春潮か」

曾等先輩は言つと、香奈の方に近づいて、酔い止めを二つもらう。

あ、そうだそうだ。

東海林は思つて、曾等先輩の方に手を上げる。

「あと、俺もです」

それを聞いた曾等先輩は、「ああ、東海林か」とか言われる。俺つてそんなに知名度あつたっけ？

曾等先輩は、赤龍にぶつかりそうになりながら、酔い止めを俺に渡す。赤龍は少し驚きながら、曾等先輩の腕を見て目を丸くしている。

東海林は苦笑いをするしかない。

受け取ると、「他にはいないか？」と曾等先輩が声を張り上げた。

他に手を上げる奴はいない。東海林は見ていて思った。

「いないな？」

最終確認。

そして曾等先輩は、「よし」と言つと、出口の方に向かっていく。そして運転手に小さく「よろしくお願ひします」と小さく頭を下げたのを、東海林は少しではあるが見ていた。

東海林は赤龍に酔い止めを渡して、水筒を赤龍に投げた。

「ほい」

聞いた赤龍は、その水筒を受け取る。

「東海林、水筒は投げるためにあるのではないぞ、水筒は、水などを入れるためにあるのじゃ」

赤龍は、東海林に何かを言い咎めているのかそうでないのかよく分からないことを言うと、その酔い止めを、口の中に頬張った。そして、水筒の中のお茶で、それを飲み下す。

「ったく」

東海林は見ながら、小さく言ってみた。全く、赤龍つてやつは、本当に何なんだ。東海林は見ていて本当に思う。

「でも、いろいろな意味で初耳だな」

そう言ったのは、向かいの席に座っている大介だった。大介は、隣に緑龍を座らせている。

聞いた東海林は、大介の方に視線を向ける。

「何が？」

東海林が言う前に、緑龍が大介に聞いた。それを聞いた大介は、すぐに答える。

「いや、赤龍が酔いやすいだなんて、知らなかったなーと思って」

それを聞いた緑龍は、少しばかり考える。「うーん、そういえば、僕も知らない」

赤龍は、大介たちの方に視線を向ける。

「赤龍が酔いやすいと分かったのは、この人の世に来てからじゃ。」

その時から分かったのじゃから、緑龍が知っているわけないじゃろ」
聞いた緑龍は、「あ、そうなんだ」と受け流す。

「青龍はー？」

雄大の延びた声が、東海林の斜め後ろから聞こえてきた。そんなことを言われても、青龍は特に何も言うことがないらしく、沈黙を保っている。

「俺も酔い止めもってるけど、飲む？」

聞いた東海林は、「あれ？」と雄大の方に言う。

「お前も酔いやすいんだっけ？こういうの」

聞いた雄大は、ん？と言いなから東海林の方に視線を向ける。手には確かに、酔い止めらしきものを持っている。

「うっん、全然」

聞いた東海林は、少しばかり目を細める。

「それじゃあ、何で持ってるんだよ」

東海林は聞いた。

聞いた雄大は、東海林に答える。

「だって、青龍が酔いやすかつたらいけないと思って」

何かが間違っている気がする。東海林の思考が甚だしかった。何か、この考えは間違っている気がする。

「それだったら、青龍に乗り物、酔いやすいか聞いてみればよかつたじゃねーか」

そう言ったのは東海林ではない。東海林の後ろの席に座っている、和山だ。

聞いた雄大は、「だって」と和山に言う。

「青龍何も言ってくれないんだもん。酔いやすいの？って聞いても、全然反応無いんだもん」

聞いた青龍は、頭を縦に振るでも、横に振るでもなかった。ただそこで、俯いている、と言う風にも見えなくはない。ただ、あの体勢からすると、眠っている様にも見えなくはない。

「確かに、今も反応なし」

東海林は、青龍を見ながらそう言った。

「まあそれはいつものことだろ」

和山は言う。確かにそれは正しい。正しいものではあるが、いろいろな意味で間違ったものを指示しそうではあった。

「でも、何か最近何も言ってくれない。ね？青龍」

何も言ってくれないそばから、そんな風に呼びかけても何を言うわけでもないと思うのは東海林の気のせいだろうかと東海林は考え

てみる。全く、と思う。確かに雄大は和山の言うとおり、よく分
らなすぎる思考をしている。

「ときに緑龍は、寒がりなのかの？」

赤龍は、緑龍に聞いた。それを聞いた緑龍は、赤龍の方に視線を
向ける。赤龍は、何故かまじめすぎる視線を向けている。どうして
かは、全くもってわからない。

「え、うん」

緑龍は言った。

聞いた赤龍は、不思議そうに緑龍の顔をじろじろと眺め始める。

大介はそれを見て、思わず赤龍に聞いてみる。

「それって、何か重要なことでもあんのか？」

それを聞いた赤龍は、「うむ？」と大介の方に目を向けた。大介
は、どこか好奇心を奮わせて、赤龍の方に目を向けている。

「そりゃあ重要じゃよ」

赤龍は言った。緑龍もよく分からない。

「何が重要なの？」

緑龍は、赤龍に聞いてみた。それを聞いた大介は、「お前、それ
分かるんじゃないのか？」と緑龍に言ってみる。「ううん、わか
ない」と緑龍は大介に返した。

「それは勿論、赤龍派か青龍派じゃよ」

緑龍には、全く分からない。

「じゃから、緑龍は青龍派じゃ。赤龍派の奴を、赤龍はまだ見たこ
とがないのじゃけれど」

赤龍は言った。

そもそも、緑龍には、その『赤龍派』と『青龍派』と言うのが、
全く分からない。何かの宗教の宗派だろうか。

「それって、どんなカルト宗教？」

緑龍は聞いてみた。

それを聞いた赤龍は、緑龍の方に視線を向ける。

「もちろん、暑がりか寒がりか、じゃ」

赤龍は声を張り上げた。そんなに声を張り上げられるほどの物だとは考えられないが、赤龍はそう言った。

「青龍、眠いんじゃないか？」

東海林は、青龍の様子を観察しながら言った。青龍は、コクリとせず、前の座席に頭をつけて、目をつぶっている。

「ほら、何か今も『眠ってます感』がすごいし」

東海林は言う。

青龍はどんどんと、椅子からずれ落ちていく。ズルズルと落ちて行って、最終的には通路の真ん中で、とぐろを巻いて眠ってしまう。

「そうか？」

雄大はふざけたことをぬかす。何でこの青龍を見て、「そうか？」と言えるのが全く分からない。東海林は本気でそう思う。

「そうか…ってお前、青龍をよく見てみる」

和山が、雄大に言った。どこか和山は、呆れた様子をしていた。

それは仕方がない気がする。東海林は思う。

「ん？」

そう言いながら雄大は、通路でとぐろを巻いている青龍の方に視線を向ける。「いつの間にレポート…」とかなんとか言っている。

青龍は、気持ちよさそうな寝息を、静かに立てている。ただそれだけのようにも、東海林は見えなくはなかった。

「あー青龍ー床とお友達になってるー」

は？

東海林はそれを聞いて、は？と思わないやつはいないと思った。

何だよ、床とお友達になるって、どこの言葉だ？

「…、東海林、」

和山が東海林に言った。和山から見て東海林は、椅子の死角にいた。つまり、東海林にも同じことが言える、と言っことだ。東海林も、和山が死角にいて、声しか聞こえない。まあ声さえ聞こえればいいんだけど。

「…何だ？」

東海林は和山に聞いた。

「やっぱり、雄大は人の理解を越えている。だから、俺たちとは話
は出来ない。そう言うことにしておいてくれるか？」

和山は言った。東海林は答える。

「ああ、つてか、それしかないだろ」

東海林は、雄大の方を見ながら言った。雄大は、青龍を様々な角
度から指で突つついてみている。何やってんだか、こいつは。

東海林も、雄大に少し呆れた。

「それって、暑がりかどっちで、寒がりかどっちなの？」

緑龍は、まともな質問を赤龍に向けた。聞いた大介は、緑龍の方
に小さく言った。

「おい、こんな奴にまともな質問するな。お前までどうかしちまう
ぞ」

はつきりと、赤龍には聞こえている。

聞いた赤龍は、大介に言った。「聞こえておるぞ」

大介は一瞬、赤龍の方に視線を向けた。赤龍は目を細めて、大介
の方に若干に睨み利かせている。

「まあ、とりあえずじゃな、赤龍が暑がりや、青龍が寒がりじゃか
ら、赤龍派は暑がり、青龍派は寒がりじゃ」

赤龍は、緑龍に丁寧に教えるように言った。それを聞いた緑龍は、
「ああ、なるほどねー」と納得する。

「お前こんなもんで納得したら、あいつみたいに変な龍になっちま
うぞ」

大介は言う。

勿論赤龍は、その大介の声を聞き逃さない。「聞こえておるぞ」
と再び言う。

それを聞いた前の人物が、赤龍の方に声をかけた。それは黄色い
者だった。

「それじゃあ私は、赤龍派だな」

その声を聞いた赤龍と東海林は、一瞬「あれ…？」となる。その

声の主を、東海林と赤龍は知っていた。だからこそ、ともいえる反応だった。

その声を発したのは、前の席の、黄色い龍だった。その隣に座っているのが、香奈。

香奈が、後ろを向いて東海林に言った。

「実はね、黄龍おうりゅうが、どうしても合宿ごしやくにいっしょに行きたいって言うから……」

つまり、こういうことだと。

東海林はそれを聞くと、なんとなくうれしくなってくる。つまりは、そう言うことなのだ。香奈も、東海林と同じように、自分の龍、黄龍を学校に連れてくるようになったのだ。

「いいことじゃない香奈さん！」

東海林は声を張り上げた。どのみちバスの中はがやがやとうるさくて、東海林の声なんて他の奴らには届かない。

「……東海林？」

赤龍は東海林の方に視線を向けた。

すると香奈の隣に座っている黄色、黄龍が、赤龍に語るように言った。

「でも、私の場合は地を司る龍だ。緑龍同様、純粋な赤龍派ではないだろうな」

そんなにもまともに答えなくても……と東海林は心の中で思っていた。

聞いた大介は、「あれ、黄龍までいんのか」とか言ってくる。緑龍は見ると、「にぎやかになりそうだね」と楽しそうに言う。どのみち、龍が一人（一匹）増えたのだから、そりゃにぎやかになるだろうさ。東海林は思った。

「そう言えば、黄龍は地を司るんじゃないかな、赤龍は火で、青龍は……」

赤龍はいろいろと考え始める。何を考えてるんだかこいつは。東海林は見ていて、本気でそう思う。赤龍はただのあほかも知れない。

雄大が、黄龍に向かっていった。

「何か増えてるー」

何を今更。

雄大は言いながら、相変わらず青龍を突っついていて。指で突っつくと、青龍は尻尾を、少しだけ左右に揺らす。雄大は面白がつて、更につんつんと突っついてみる。そんなに面白いかそれが。東海林は心の中で言ってみる。

「新手か…、」

なんとなく面倒くさそうに、東海林の後ろの席の和山が言った。

「一体この世には何匹龍がいるんだ」とか、和山はぼやいている。

そう言えば、和山は黄龍を見たことがないんだっけ？東海林は考える。そして、そう言えばと思う。そう言えば、俺もそんなに黄龍を見たことはないや。

と言うことは、これからは赤龍たち同様、と考えていいのだろうか。東海林は思った。

「とりあえず、私も一緒に行くことになった。だから、よろしく頼む」

どこか気強そうな声で、黄龍は言った。東海林はなんとなく、疲れる合宿になりことだけは承知した。

今もバスの中はうるさく、ワイワイガヤガヤの嵐だ。

東海林は「はあ…」と小さくため息をつくと、赤龍が、「東海林、ため息は厳禁じゃぞ」とか言ってくる。そんなことは分かっているが、東海林はため息をしたくない気分だった。はあ…。

窓の近くで頬杖を突いて、東海林は窓越しの風景を見つめた。何だか、やることがない。黄龍が来て、がやがや騒いで、みんなハイになって行く。これだと、合宿の場所に着くまでに、かなり体力消耗するぞ。

東海林は思い、一度あくびをした。「ふわあ…」昨日は夜更かしなんてしていないが、なんとなく、寝坊をした制からか、少し眠いような気もしてくる。みんなは、がやがやと騒いでいる。赤龍も元

とか言ってみる赤龍。

「トランプカードオープン！攻撃　　化、更にチェーン
！そして…」

もうこれ以上はダメ。見せられません。東海林はカードゲームに、
霧のようなものを掛けようと思った。というか、もうかかっている
ようにも見えなくはない。

「死ぬがいい！」

とか赤龍は発狂している。

東海林はそれを見た瞬間に思う。これ、何かがおかしくなってい
る…？

東海林は思わず、大介の方に尋ねてみる。

「お前、自分が何をやってるのか分かってんのか？これって思いつ
きり著作権にかかるぞ?!」

聞いた大介は言う。「分かってる、このゲームは遊戯お…」

「もうやめろ、それ以上言うな」

東海林は歯止めをかける。

何だ、何がどうなってるんだ。

東海林は思いながら、あたりを見回してみる。一見普通に見えな
くもないが、明らかにこの二人の反応は異常だ。東海林は見ていて
思う。

とりあえず、東海林は緑龍の方に視線を向けてみる。緑龍はライ
トノベルを読んでいる。その名前は涼　ハ　の憂　…、だと？

「おい緑龍！その小説を一体どこで手に入れた?!白状しろ!」

聞いた緑龍は、「あ、東海林さん」と、なぬ喰わぬ表情で言っ
てる。

「これ、大介のバッグの中に入れてたんで、勝手に読ませてもらっ
てるんですよ。宇宙人未来人…」

これ以上は聞かないことにしよう。

東海林は思うと、頭が痛くなって食えていることを実感する。やば
い、もう訳が分からなくなってきたている。

東海林は、雄大の方に視線を向ける。雄大は相変わらず、普通に青龍をつんつんと突つついている。ふう…、こいつらは特に何もなっていないみたいだな。特に著作権とかそう言ったものを侵害するよなものは。

東海林は思いながら、雄大の方に視線を向ける。よく見ると、雄大は木の枝で、青龍を突つついている。あれ、あんなものどこで手に入れたんだ？

「うんちよ、うんちよ」
もうおしまいだ。

聞いて東海林はすぐに思った。

そして後ろからも妙な声。

「やつほー！合宿着いたらエロゲ三昧だー！Ai とかマジやべー」
どいつもこいつも、どこか別の世界の物を取り出している。この異変に気付いているのは俺だけなのか？

思いながら、俺はみんなを見回してみる。よく見ると、UN とか、『P P』とかモン とかやっている。ちよつと待て、この小説の概念はどこに行った、この蒼空への扉の概念は、一体どこに行った。東海林にもよく分からないが、越えてはならない一線をこの小説は越えてないか？

思いながら東海林は、前の方を見ようとしたその瞬間、
『ぴぴ ぴ ぴ ぴ ぴー』

そんなような音が聞こえてきた。音と云うか、台詞と云うか。何と云うか。もうおしまい、The e - nd .
やっぱり、東海林が眠っている間に、何かがおかしくなったようだった。それは、確かなことだと、東海林はある種の確信を得ていた。

何かがおかしい、なんとなく、そんな気がした。

別に夏休みが何回も繰り返されたわけでもなく、マゴゴソラが空を飛んでいるわけでもなく、クラス召喚 争が起きているわけでも

ない。起きているわけではないのだが、みんな、どこかに行ってしまっている。

東海林たちは、合宿のホテルに着くと、すぐに自分の荷物をホテルのエントランスへと持っていく。そして、一息ついた時だった。

その時、東海林の近くで、聞いたことがないようなあるような声が聞こえてきた。

「おなかへったっていつてるんだよ、東海林！」

赤龍が、一瞬リアルな声で東海林にそう言ってきた。うえ…、気持ちわりい…。

「おなかいっぱいごはんを…」

聞いた東海林は、赤龍に言った。

「そんな気持ち悪いことを言う奴には、このシールドストレミングを食らわせてやる」

東海林はどこからともなくそれを持ち出すと、鼻をつまみ、それを赤龍の方に投げつける。中から、『醸すぞー』とか言って小さな何かがたくさんあたりにまき散らされる。「臭…」とか言う声が、あたりから聞こえてくる。俺、いつからこんなものが見えるようになったんだっけ？

赤龍は、あまりの臭さに倒れてしまう。目を回す。ふらふらする、はははどうだ、恐れ入ったか。

「東海林…、この恨み…、いつか…、きっと」

とか言いながら赤龍も、どこからともなく取り出した藁人形の赤い紐を解こうとしているちょっと待ったこの状況でそれはやめるあ

！。
赤龍は赤い紐を解く。

恨み…、聞き届けたり。

聞き届けなくていいから。

とか東海林は思う。そして東海林の頭の上から、シールドストレミングが落ちてくる。刃シャットはじけて、東海林はめまいがした。ああ、このにおい、合宿中にとれるかな？

東海林は思いながら、はあ…、とため息をついてみる。

その時、号令がかかった。

「みんな、整列」

それを聞いたみんなは、軍隊のように、さつと並ぶ。みんな、目がどこか別の方向を向いているような、そんな勢いだつた。

前には、清原先生と、もう一人の顧問、下滝先生しもたきがいる。

清原先生は、小さくみんなにつぶやき始めた。

「諸君、私は戦争が好きだ。諸君私は戦争が大好きだ」

ちよつと待て。

東海林はそこで歯止めを掛けなくなる。あの台詞をみんなに長々と聞かせるつもりか？思いながら、東海林は自分の臭いの臭さに呆れてみる。あーあ、やっぱりこれ、何かおかしいって。

「ということ、みんな自分の部屋に行ったら、戦争をしてください、いいですね？」

「だめだろそんなの！」と東海林一人だけ。他は「はい！大佐」とか訳の分からないことを言うってくる。あえてわけのわからない、と言うことにしておこう。東海林は思った。そして、清原先生が言った。

「それでは、まず自分たちの部屋に、荷物を置いてきてくださいね」そして、みんなの反応は「はい」といたって普通。と言うか、なんだかさつきから、普通じゃないことしか起こっていないような気がする。

すると、みんな自分の荷物を手にして、しおりを見ながら自分の部屋に行こうとする。東海林はため息をつきたくなりながらも、自分の荷物を手にしてみる。重くも軽くもない気がする。さつきのに比べれば。

「東海林の部屋は、何号室じゃ？」

赤龍は東海林に聞いた。聞いた東海林は、「えつと…」と言いなからしおりを見る。しおりには、東海林の名前が書かれていない。

「あれ…、おかしいな。昨日までは確かに…」

東海林は言ってみる。そして、昨日の記憶を手繰ってみる。確かに、東海林の名前が書かれていたような気がする。

東海林は、しぶしぶ清原先生のところへ足を運ぶ。清原先生は、なんだかものすごい存在感を放っているエアガンを持っている。何でこんなものを持っているんだろう、と思うのは東海林だけだろうか。

「あの、清原せ……」

言いかけた時だった。

清原先生が、ものすごい形相で東海林の方に、その銃の銃口を突きつける。だめだ、速い、速すぎて、見えなかった……ッ。

「あら、ごめんなね。てつきり先生の命を狙う刺客かと思っちゃって」

どこかおとぼけ気味に、清原先生はそう言ってみせる。もしかしたらこの人の近くに行ったものは死ぬんじゃないか？東海林は考える。

「あ……、はあ……」

しかも刺客って……、と東海林は思う。一体どんだけのことをやらかしたんだよオイ。

「あの、清原先生、」

東海林はそう言いながら、自分のしおりを清原先生の方に向ける。「何？」と清原先生はしおりに目を向ける。

「しおりに俺の名前が載ってないんですけど……」

東海林は言ってみる。

それを聞いた清原先生は笑う。ははは、と。

「あたりまえじゃない」

は？

東海林は思った。と言うか、こんなこと言われて、まず、は？とならないやつはいない。東海林は確信した。

「だって、しおりに自分の名前なんて書いてあったら、誰のしおりがどのしおりか分からなくなっちゃうじゃない」

いろいろな部分で問題があるこの発言に俺は突っ込みを入れるべきか否か。

東海林は、もう面倒くさくなってきた。もう何なんだこれ、と言うか、何かが崩壊しているぞこれ。

「…、それで、俺の部屋は一体…？」

東海林は聞いた。そしてそれを聞いた清原先生の返答は、非常にあっさりしたものだった。

「どこでもいいわよ？」
「は？」

二回目、トータルしたら一体何回になるのだろうか。東海林は思わず考えて、考えることさえあほらしくなってくる。

「どこでも…って、どこでもってことですか…？」

東海林は尋ねた。

聞いた清原先生は、にっこりと東海林に笑う。「ええ、どこでも」と清原先生は東海林に言う。

「た、だ、し、」

清原先生は言うつと、

ガチャリ

エアガンの弾を、思いつきり装填するようなそぶりを見せた。つまり、危ないということだ。うん、危ない、この人危ない。

「間違えたら、シャ・サ・ツ？（キラ）」

終わりだってそれ。

東海林は思った。と言うか、何なんだその滅茶苦茶な設定は。もつとまともに、普通に考えてくれ。

「それじゃあ東海林行くぞ、適当に入れば当たるじゃろ」

赤龍は東海林に言った。

「当たんねーよ！もしはずれたら殺されるぞ？消されるんだぞ？しかも学校認定で殺されるんだぞ？！」

東海林は赤龍に言った。

そして、それを聞いた清原先生は、はははは、と笑う。

そして東海林の方につこりと、笑顔と銃口を向ける。

「早くいかないと、おしおきよ？」

東海林は逃走した。

とりあえず東海林は、まだまともな精神をした大介にしおりを見せてもらった。それを見たところ、東海林の名前は大介たちと同じ部屋にあつて、なんとなく東海林は、どこもない安心感を得ていた。この安心感は、一体あと何分続くんだろう。東海林は思った。

見るからに高級ホテルの廊下を歩きながら、東海林は赤龍に言った。

「これだけ見ると、なんだかハンスさんがいつも泊まってるような感じの場所だよな」

聞いた赤龍は、「そうじゃなー」と答える。どこから返事にも聞こえなくはないその返事を、東海林は流すことにした。いちいち気にしていたら、もう身が持たない。

「でも、よくこんなホテルに泊まれたよな、部活。やっぱり、日ごろの行いがいいからか？」

東海林は若干冗談半分に言ってみた。そして赤龍は言う。

「日ごろの行いがいいなんて思ってたのはお前だけなんだよ東海林」

声が黒かった。と言うか、なんでそんなところでキレたような口調になるんだ。東海林は思いながら、赤龍の方に視線を向ける。

赤龍は眠そうに「ふわぁ…」とあくびをした。何だろう。東海林は思った。

なんだか、いつもとは限りなく透明に近いブ　な気分だ。東海林は意味も分からずにそう思ってみた。

もしかして、と考えてみる。

おかしいのは東海林以外の全員じゃなくて、東海林も含め全員じゃないか？もしかしたらこんな思考をしているのは、東海林が

妄想壁になったからで、もしかしたらみんなどつか頭ぶつ飛びの状態になつているんじゃないか？もしかしてもしかしたらそうなるのか？でももうもしかしてもしかしちやつているのかもしれない。

東海林は考えながら、自室になる部屋を見た。そして「ここだな」と東海林はしおりを見る。しおりには、強引に東海林の名前がボールペンで書き加えられている。

こんな高級ホテルの一室、一体どんな風になつてるのだろうか。東海林の心が、ある種のときめきを覚えた。

東海林はドアノブを回した。

その奥にあつたのは、ぼろい畳の部屋だった。

「…、あれ？」

東海林は言つてみる。そしてその部屋を見回してみる。六畳一間の部屋に、裸電球、そして大介と雄大と緑龍と青龍、ついでに和山までいる。大介は遊 王のカードを部屋に広げて、雄大は相変わらず、ピンク色のウ コの着ぐるみを着た青龍を木の枝でつついている。緑龍は相変わらず 宮 ルヒシリーズを読んでいて、和山は隠れてこっそりゲームをやっている。

「はあ…」

東海林はため息をした。

「東海林、ため息はするでないぞなう」

赤龍は、いつもとは違う語尾でそう言ってみた。聞いた東海林は、更のため息をしたくなつてきた。

つまり、ここが東海林たちの部屋だということだ。高級ホテルかと思つたら、中身はボロツちい畳の部屋で、しかもみんな壊れている。どこか、遠くの世界の人たちになつている。

「ありえない…」

東海林は思わずそう言った。

そしてそれを聞いた赤龍が、東海林に言った。

「なんてことは、ありえ…」

「それ以上言うな」

東海林はそこで歯止めをかけた。これ以上言ったらダメ。東海林は分かっていた。分かっていたから言わせなかった。

東海林は靴を脱ぐと、はあゝ、と心の中でため息をしながら、部屋の一角に自分の荷物を広げた。そして、その畳の上に座った。

その時だった。

畳が、グシャ！とか言っただけ。

「ええええええ！」

東海林は思わず声を張り上げる。畳が、東海林のところだけぐつしやりとひしゃけて、破れている。しかも臭い。そしてどこかで見ただことのあるような、ニコニコとした小さな生き物が、『わー』とか、『醸すぞー』とか言ってくる。

「あー、東海林こわしたー」

そう一番初めに反応したのは、雄大だった。雄大は東海林の方に、何故かニコニコと笑っている。やめるそのニコニコは、とか東海林は思う。そんなことが、雄大に分かるはずもなかったりする。すると、今度は 戯王のカードを片手にした大介が、東海林にこう静かに言った。

「東海林、今すぐ自首してこい、そうすれば罪が軽くなるぞ」

何なんだ、とか東海林は思う。

と言うか、誰に自白するんだ？東海林は考える。勿論それは先生にだろう。先生は二人いる。清原先生と下滝先生。中学の顧問は、清原先生だ。

終わる。

だめだ、人生がオウルノ（ハ〇ハ）ゝ。そんなことは自殺行為だ。「だめだ、何としても隠し通すんだ。そうしないと、俺、きつと殺される」

聞いた赤龍は「いえーい殺されるー」とか言ってみる。やっぱり赤龍も、どこか別の遠くの場所に行っている。

「大丈夫ですよ東海林さん」

緑龍が、唯一まともなことを言ってくれる。

「危険な橋も、みんなで渡れば怖くない、です」

何だか俺の意見が消え去っているような気がするのですがそれは気のせいですか？

東海林は、もう何が何だか、だんだんと分からなくなってきた。そもそも、これに何が何だかわかる奴なんていない。そんな気がした。

「うんちよー」

雄大は言う。

ほら、もう訳が分からない。

来た早々から、スケジュールには『練習』と無謀なことが書かれている。しかも十時間くらい。その間、食事も休憩も一切書かれていない。これは死ぬと言うことだろうか。東海林は思った。

東海林はため息をつきたくなりながら、バスクラを片手に、クラリネットの練習部屋へと足を向けていた。

赤龍は、見かけいつも通り、楽しそうに歩いている。それを見た東海林は、赤龍に聞いてみることにする。

「おい、赤龍」

東海林は赤龍に言ってみる。聞いた赤龍は、「うむ？」とか言いながら、東海林の方に視線を向ける。これはまだ普通の反応だ。東海林は見ていると思う。

「おかしいって、思わないか？」

東海林は赤龍に聞いた。聞いた赤龍は、「何がじゃ？」といつも通りではあるが、非常に問題のある発言をする。

「いや、だって、みんなおかしいだろ。急に妙なこと言いだすし、急に頭おかしくなったみたいにふるまうし、それに、何だか雰囲気がいいつもと全然……」

言いかける。

その時赤龍が、東海林と歩くのをやめる。東海林ははっとなる。
え？何だ？

「東海林……」

赤龍は俯きながら、静かに東海林に言った。聞いた東海林は、心のどこかで、威圧感のようなものを感じていた。

「……何だ、赤龍」

東海林は、恐る恐る赤龍に言った。赤龍は東海林を見る。

赤龍の瞳孔が、更に細く割れている。くつきりと、東海林にはそれが見て取れた。

赤龍は、東海林を睨みつけるように見つめている。

「本当に、そう思うのか……？」

東海林の喉が、つぶれたみたいになり、声が出なかった。何がどうなっているのか、よく分からなくなってきた。

「……」

赤龍の目が、東海林に言っている。

ここで回答を間違えたら、お前は絶対に死亡フラグだ。

東海林が、このまま黙っているという手もある。しかし、それが本当に正しいのか、東海林は考える。

だめだ、正しくない。

東海林は考え直す。何か、何か言つべきことが。

瞬間、

赤龍がいつの間にか、東海林の目の前に来ていた。いつ？東海林は考える。やはり龍だから、素早い動きが可能なのだろう。東海林は考えた。

「本当にそう思うのかと聞いておる……」

赤龍の声だった。

それはどこまでも赤龍の声で、東海林の中では、全く別物の声にしか聞こえなかった。何か、別物。

ドラゴン？

東海林は考える。そして、固唾をのむ。東海林が、少しばかり息

苦しくなっていることに気付く。

「…、」

どう答えるべきだ。

東海林は考える。ここは、どう答えるべきなんだ？俺は、どうすれば死亡フラグを立てずにこの場を切り抜けられる？

東海林は考えて、賭けに出た。

「…、い、いや」

何が正解かなんて分からない。もしかしたらこれは、本当に生存率1%なのかもしれない。東海林は赤龍を見ていて思った。

「そんな事、思っわけないじゃないか。ただの、冗談だ…」

東海林は、強引に自分の顔を笑ませると、赤龍の方に視線を向けた。

赤龍の視線が、一気に和らいだ。

「そうか、それならいいのじゃ」

笑っている。赤龍は、自然なまでに東海林に微笑んでいる。だめだ、ギャップがありすぎて怖い。東海林は見ていて思った。

「それでは、練習に行くかの」

赤龍は言って、東海林の前を歩き始めた。

何が何だか分からないのは、本当に俺だけなのか？

東海林は思った。こんな異変に気付いたのが、本当に東海林だけなのだろうか。他のみんなは、全員こんな感じなのだろうか。

東海林は考えた。

練習は、いつも通りな気がした。そんな気がしたのは、東海林だけだろうか。そんな気がしなくもなかった。

憶羅先輩は、少しばかり微笑みながら、いつものように練習をしている。こんな風に。

「それじゃあ、百四十四小節目から」

憶羅先輩は、クラリネットのパートリーダーだ。つまりクラリネットの中で一番偉い人だ。偉い人ではあるが、憶羅先輩は少しどこ

かが飛んだところがある。だが、今のこの状況を見ると、その憶羅先輩が、非常に優しく見えてくるのは、東海林だけではないはずだ。『はい』

と、東海林たちは返事をする。

合宿では、大概学園祭の練習をする。今は夏休みだが、二学期に入った瞬間に、もう全体学園祭モードに突入する。だから、はつきり言っただけ東海林たちには時間がない。ついでに、時間がないときにこんな妙なことが怒っているのだから困りものだ。東海林は思った。クラリネットのみんなは、特に妙な気を起こすわけでもなく、普通に吹いていた。普通に演奏して、普通に練習して、普通に憶羅先輩の言うことを聞いている。これは、異常な世界で起こっている普通の出来事、と言う物だろうか。それだけ考えていると、訳が分からなくなってくるような気がしなくもない。

その時だった。

ガチャ、つと、クラリネットの練習部屋に入ってきた人物がいた。それは曾等先輩だった。

みんな曾等先輩の方向に向く。東海林も、曾等先輩に目を向ける。一見しただけだと、曾等先輩も普通のように見えなくもない。

「食事らしいです」

曾等先輩は、憶羅先輩にそう言う。「分かったー」と憶話先輩が曾等先輩へ返すと、一瞬、曾等先輩と憶羅先輩はお互いの目を見つめた。

何だ？

東海林が考えようとしたその時には、もう曾等先輩は、別のパートの方へと足を運ばせていった。

「それじゃあ、そろそろ昼食らしいから、みんな食堂へゴー！」

憶羅先輩は、まだいい方だと思った。

それを聞いたみんなは、『はい』とか言いながら、食堂の方へと足を向ける。クラリネットはそのままだ。

もしかしたら、と東海林は思う。

赤龍は丁度、床でとぐろを巻いている。眠っている。あの話をするにはもってこいの状況だ。東海林は思った。

東海林は、楽器や譜面を片付けている憶羅先輩に近寄った。

「あの、先輩」

東海林は憶羅先輩に言った。

聞いた憶羅先輩は、「ん？」とどこか楽しそうに、東海林の方へ向いた。

「どうした？」

憶羅先輩は東海林に聞いた。

「ちよつと聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

東海林は聞いた。

憶羅先輩の視線が、少しばかり細くなった。「それは、どんな話かな？」憶羅先輩は、東海林に聞いた。

東海林は話し始める。

「なんだか、みんなおかしいんですよ。みんな、何だかいろいろな境界線を越えた発言をしているというか、何だかすごくおかしいというか、いつもとは全く違うというか」

憶羅先輩が言った。

「シヨウジン、君はまだこの件には」

関わっちゃいけない。

まるで、何かを知っているような口ぶりだった。

聞いた時、東海林ははっとなった。やっぱり、憶羅先輩はこれについて何かを知っている。東海林はさっきの言葉で、確信した。

「やっぱり、何か知ってるんですね、先輩」

憶羅先輩、東海林たちに力を貸してくれる、術師か器かもわからない、不明な人物。赤龍が見える。

東海林の中に記憶されている憶羅先輩は、これだった。

憶羅先輩は、どこかため息をつくように、東海林に言った。

「いずれ、君にもこの話がある。だから、それまでは待つことだ」

憶羅先輩の口調が、いつもの口調より幾分穏やかで、冷静だった。

しかし、どこかその中に、力を感じた。

東海林は、口を紡いだ。それ以外に、出来ることがないと思ったからだ。

憶羅先輩は、譜面を片付け終わると、東海林の方に目をやった。

その眼は、笑んでいた。

「それじゃあ、食堂に行きますかー！」

憶羅先輩は、どこまでも明るいように見えた。

東海林には、何が何だか分からなくなっていた。

何で？

東海林は思った。全くと言っていいほど、それは意味不明で、訳が分からなかった。と言うか、何なんだこれは、何でこんなことが起こっているんだ？

豪華なホテルでの昼食は、カップラーメンだった。

「おー、いとおしのカップラーメン！」

しかも、赤龍たちの分まである。

しかも、カップラーメンの麺が、少し伸びかかっている。これって、本当にホテル内で食べるような食事なのか？

「旅費ケチつたな」

大介が、東海林の隣でボソツと言いながら、足元で自分のデッキを見つめている。言うこととやることに一貫性を持たせてくれ。東海林は心の底から思った。

「でもやっぱり、失は理解しがたいものがありますね、東海林さん」

緑龍が、東海林の方に声を渡らせた。東海林はそれを聞いて困る。緑龍は緑龍で、ヲタクと呼ばれる種族の仲間入りを果たしているよくな気がする。

「…そんなこと言われてもな」

緑龍に反発したのは、東海林と言うよりも大介だった。

「何だと？東海林はやっぱりシン 口派か？見た目儀 派に見える

けどな」

何でその方向に話が飛ぶのか、東海林には全く理解が出来ない。と言っか、もう意味が分からない。

「うんちよなブルード　ー」

相変わらず雄大は、ピンク色の　ソコの着ぐるみを着た青龍を、木の枝でつついている。青龍は起きてもなお、その着ぐるみを着たままだということが、東海林には驚きで仕方がない。しかも何故か、雄大と青龍だけ、食べ物がりゾット。見た目真っ黒りゾットと真っ赤りゾットだ。

「…、徒然なるままに、」

青龍はつぶやく。はあ、と東海林は思う。

まともなやつはいないのか？東海林は考える。そして、一人いることを思い出す。憶羅先輩は少なくとも、今はまともな方だ。

「もう、早くしないと麺が伸びる…、全く…」

東海林はぼやきながら、あたりを見る。先生たちがまだ来ていないためか、みんなまだ食事が出来ない状況にある。

東海林はなんとなく、赤龍の方に目をやった。

「ふー、うまかった」

赤龍は言いながら、自分の腹を数回たたく。

へ？

東海林は思うと、赤龍のカップの中をそっと覗いた。そこには、さっきまで満タンになって入っていたラーメンが、消滅していた。

どこへ？

そんなの決まってる。

「赤龍、お前は団体行動が出来ないのか」

東海林は言った。聞いた赤龍は、のほほんとした表情で、東海林の方へ視線を向ける。

そして突然、

「お持ち　りー」

とかのほほんとした顔で東海林に飛びついてみる。ちょっと待て、

赤龍お前は雄だろう、何で俺に飛びつくんだ。

東海林は何十回か、心の中で赤龍に言った。

「赤龍、離れろ」

東海林が行つても、聞く気配はなかった。

その時だった。

「みなさん、注目」

そう言ったのは、清原先生だった。清原先生はみんなの方に視線を向けながら、あたりに目を配っていた。

みんなは一斉に、清原先生の方に視線を向けた。

清原先生の隣に、下滝先生がいた。しかし、下滝先生は、清原先生よりも、存在感が小さく見えたのは嘘ではない。

清原先生は言った。

「今日のおかずは、ラーメンです」

おかずって言わないだろ、それ。

東海林は心の中で言った。心の中で以外、言う場所がなかったともいえる。東海林は考えると、ため息に似た息を、小さく吐いた。

「と言うことで、有効活用してください」

ちよつとまつたなんだその有効活用って。

東海林は清原先生に、心の中でそう言った。ラーメンを有効活用だなんて、聞いたことがない。

東海林は思いながら、ラーメンの方に視線を向ける。一体どうやって有効活用するっていうんだ、この熱いラーメンを楽器の中にも流し込みましょうってことか？そんなのは自殺行為だ。

「それでは、」

始め！

普通ここで、いただきますと言う気がするのは、東海林だけだろ。うか。東海林は考える。そして、考えた瞬間だったとも言える。

東海林の頭に、ラーメンが飛んできた。

バシヤッ！

東海林の頭に、まるで帽子のようにラーメンがかぶさった。これ

はどういうことだ？東海林は考える。

東海林は目を開く。熱い、でも、耐えられない温度ではない。ラーメンのカップを外して、髪の毛のようなラーメンをぶら下げながら、東海林はあたりを見回していた。

ラーメンが、有効活用されていた。つまり、ラーメンが、あたりを飛んでいた。

つまり、食事と言うのは、フードファイトのことだったんだ。東海林は納得した。

「えーい！」「ほれ！」「イヤー！」「これでも喰らえ！」

みんな熱気が立っている。湯気までたっているように見える。しかも食堂の一角には、充填用の出来立てラーメンまで構えてある。

「あははラーメン飛んでるーノンフライー」

雄大は、相変わらず訳の分からないことを言う。とか思うと、青龍は一人黙々と、真っ赤りゾットを食べている。

「…、日暮、硯に向かひて」
もういいよそれは。

東海林は思いながら、あたりを見つめた。赤龍はいつの間にか東海林から離れて、空中で飛んでいるラーメンを、口の中でキャッチしていた。

「…」
もう何でもいいかもしれない。

東海林は本気でそう思った。

作戦会議

そこは、食堂の近くの小さな部屋だった。本来そこは使われるはずのない部屋、練習でも使われない部屋だが、そこには確実に、数人の人物がいた。

何か、おかしい。

その部屋にいる全員が、この合宿に同じことを抱いていた。この合宿は、何かがおかしい。何かじゃない、根本的な何かがおかしくなっている。合宿だけの騒ぎじゃない。

つまりは、そう言うことだ。

「一体どうなってるんだ、この合宿はよ」

一人が口をはさんだ。その人物は、非常に苛立っている様子で、尖った歯を歯ぎしりさせた。

それを聞いた一人が、その人物に言った。

「同感、一体どうなってるのやら」

どこか眠そうで、眠たくなさそうな声だった。

聞いた他の人物が、言った。

「…まずあり得ないと思うんだけど…」

それは、どことなく保守的で、穏便な声だった。

それを聞いたもう一人が、その穏便そうなその人物に声をかけた。

「何だ？何か心当たりがあるのか？」

それは、落ち着いていて、冷静な声だった。しかしどこか、何かに対して不安を抱いているような、そんな声でもあった。

聞いた、穏便そうな声の人物が、小さく俯いて言った。

「うん…、でも、まずあり得ないと思うし、それに、だって、ほら、ありえないから…」

どこかで破綻しているような、そんなような気がしなくもない言葉だったということが、その人物らには印象的だった。

その時だった。

苛立った声の人物が、その穏便な声に尋ねた。

「ちよつと待て、それってまさか、あれのことか？」

聞いた眠そうな声の人物も、少しばかりはつとなる。

少しばかり、頭の中でいろいろと整理してみる。そして、まさかとは思う。その人物は言った。

「…、可能性は、無きにしも非ず」

聞いた穏便そうな声の人物が、少しばかり声を沈めて言った。

冷静そうな声が、穏便そうな人物に向いた。

「その通りだ、可能性はなくはない。それに、最近その頻度も増えてきている。あの人のおかげでそれが分かるが、最近、ここまでではないが、確かにこれと似たようなことが起こってる、だから、ありえなくはない」

それを聞いたその穏便そうな声を人物が、少しばかり不安になる。

「どうして、こんなことが…」

聞いた苛立った声の人物が言った。

「そんなことはどうでもいいんだ」

はつとなった。

一瞬ではあるが、一聞しただけだと軽はずみに聞こえなくもないその台詞を、少しばかり不快に思う。

しかし、その苛立った人物は、こう続けた。

「俺たちは、この問題を解決する。必ずな」

そして、なんとなく空気が和む。

冷静そうな人物が、少しばかりその人物に笑んだ。「全く、その通りだな」と、小さく言った。

「でも…」

眠そうな声の人物が言った。みんな、その人物の方に視線が行く。眠そうに目を半開きにしながらも、その人物は言った。

「確かに、こんなに大きな規模の物は初めて。だから、あの人の意見聞いた方がいい」

それを聞いたみんなは、「確かにな」とか、「ええ」とか小さく

眩く。

「待つとするか、まだ時間はあることだし」

冷静そうな人物が、そう言った時だった。

そこに、一人の人物が、少しばかり楽しそうに歩いていた。楽しそうに歩きながらも、どこか不愉快そうな、そんな、よく分からない表情をしていた。そもそも、その人物の本当の気持ち分かる人物なんて、誰もいない。

「呼んだー？」

その、楽しそうな人物が、四人に言った。

聞いた眠たそうな人物は、小さくため息をつきたくなくなる。全く、現れる時ぐらいちゃんと言いつきしを見せてほしいものだ。

心の中で思った。

「はい、早速なんです、本題に……」

冷静そうな人物は、少しばかり冷静でなかった。焦っていた。この状況が、これからどうなっていくのか、そんな事、その人物らには想像が出来なかった。

「俺が状況把握、」

楽しそうな人物は、笑いながら言った。

「できてないと思ったー？」

それを聞いた冷静そうな人物は、一瞬ではあるが、冷めた。

焦りが、少しではあるが和らいだ。その人物には、不思議な事が出来る、そう言うことだ。

「……、いいえ、」

そして、楽しそうな人物は、穏便そうな人物の方に視線を向けた。「それで？何だと思うの？」

聞いた穏便そうな人物は、少しばかり戸惑った。しかし、息が整ってきたのを感じると、小さく深呼吸して、こうその楽しそうな人物に言った。

「はい、私は、この件のこと……」

その人物は、推論だけを述べた。

なるほど、としか言いようのないことだった。これは、対処したいものがあるな。その人物は、隠れてその話を聞いていた。

その部屋は、確かにあるだけのように見えた。ただあるだけで、素通りされそうな、どこにでもあるような部屋。しかも、部員が寝泊まりするような和室ではなく、洋室。つまり、誰も来ない場所だということだ。

その人物は、聞き耳を立てていた。ただ、誰にも気づかれないように。もし気づかれたら、一目散に逃げるのみ。そう思っていた。

『なるほどね』

楽しそうな人物の声が、その部屋から響いてきた。聞いたその人物は、固唾を飲んだ。まさか、こいつらも同じなのか？

『確かにそれは一理ある、と言うか、今のこの状況を細かく観察した結果だからね。確かにそれは信用できる。と言うか、多分本当』

その楽しそうな人物が言うと、『それじゃあ…』と冷静そうな人物が口をはさんだ。

『何でこんなに、規模が大きいんですか？いつもなら一人二人レベルなのに…、今回は、部活レベル…』

その人物は、よく耳を澄ませた。それが、その人物の聞きたいことでもあるからだ。

それを聞いた楽しそうにしている人物は、『いいや』と、その言葉を否定した。

一瞬、その人物にもわからなかった。今のどこが破綻していたのか、はつきり言って分らなかった。

楽しそうな人物は、こうはつきりと、声を上げた。

『多分今回は、部活じゃなくて、世界レベル』

ハツとなる以外、何もできなかった。

世界レベル？世界レベルでこんなことが起こってるって言いたいのか？あいつは。

その人物は思いながら、更に耳を澄ませる。

『世界…って、それじゃあまさか、俺たちだけじゃなくて…』

苛立っている人物の声が、その部屋から響いてきた。それを聞いたその楽しそうな声の人物は『うん』と軽く言った。

『多分そうだと思う。でも……………』

「ごによごによとした声で、壁越しには聞こえ辛い声だった。その人物は更に、耳を立てておく。

『だから、俺いろいろと調べてくるね？もう目星はつけてるし』

聞いたみんなは、一瞬驚いた。

『まさか、もうだったとはな』

眠そうな人物が、その楽しそうな人物に言った。『ちよつとした考えだよ』と、その楽しそうな人物は笑う。

『と言うことで、俺行くね、見つけてくる。もし俺だけで対処出来たら、俺だけで対処しておくから』

そう言い放つと、音が聞こえた。

ガシャ…

それは、ドアが開けられた音だった。

聞いたその人物は、少しばかり落胆する。きつともう、めぼしい情報は得られないだろう。そう判断した時だった。

憶羅先輩が、目の前に、楽しそうな表情で立っていた。

「やあ、片島君^{かたしま}」

はっとなった。

うかつだった、とでもいうべきかもしれないな、この際。

片島は、そう思った。

練習時のハプニングは自分で何とかしよう

憶羅先輩に、一度シャワーに入ってきていいか尋ねてみた。でも憶羅先輩は、どこか楽しそうに、「だめ！」と言うだけだった。しかも笑いながら、東海林に言った。

「…、え、だめですか？」

東海林は、落ち込みそうな声で、憶羅先輩に聞いた。聞いた憶羅先輩は、「当たり前でしょー」と東海林に言う。

「もうすぐ練習なんだから」

東海林にとつて、この台詞はどことなく矛盾しているような気がしてならない。そして東海林は、考えを改めることにした。

憶羅先輩はまともな思考をしていると思っただけど、それは間違いだった。今のは東海林の間違いで、憶羅先輩の間違いではない。ただ、それだけのことだ。東海林は思っただけ、ため息をつきなくなった。はあ…。

「それに、ラーメンの臭いがするから、赤龍君がとってもショウジン君のこと気に入ってるじゃん」

憶羅先輩は、東海林に笑いながらそう言った。東海林は苦笑いしながら、自分にロープのように、強くからみついてくる赤龍に言った。

「はっはっは…」

もう、笑うしかなかった。東海林は、仕方がなく笑った。

「東海林は相変わらず、GOODなおいがするの」

発音がおかしい。東海林は聞いていてすぐに思った。と言うか、そう言う問題ではない。においとかそう言う問題のなら、東海林はここまで嫌がったりはしない。嫌なのは、さっきから赤龍が、東海林の体から離れてくれないことだ。つまり、ゼロ距離。気持ち悪い。

「…、」

しかし、はつきり言つて東海林はもう、沈黙を保つことしか、憶羅先輩にすることはなかった。全くと言つていいほど、東海林には悪いことしか起きていない。と言うか、この合宿に来ていいことが起こっていない。

東海林はしぶしぶ「分かりました……」と呟くと、バスクラの近くの席に座ると、小さく言つた。

「はあ……」

それは、ため息だった。

これはいじめなのだろうか。部活レベルの、東海林へのいじめなのだろうか。東海林は一瞬考えて、否定する。さっきの憶羅先輩の態度は、明らかにおかしい。確かに、ラーメンをかぶつて風呂に入るなつて言う憶羅先輩もおかしいが、その前の、いつもの憶羅先輩では考えられないくらい目の真面目な顔で、東海林に何かを示唆した憶羅先輩も、どこことなく納得できない。

考えている、その時だった。

「ため息をしても、今の東海林のGOODなおいなら、全然許せるぞー」

だから、発音がおかしい。

東海林は思いながら、バスクラのケースを開けた。赤龍が抱き着いている場所が場所で、何とか両腕は自由がきく。しかし、重い。

東海林はバスクラを組み立て始めた。頭の上が、非常に気持ち悪い。と言うか、臭いまで気持ちが悪い。

その時だった。

クラリネットの、バセットホーン（F・dur）（ファから始まる音階）のクラリネット族の楽器）の先輩が、東海林の隣に座った。

「……なかなか面白いワックスを使ってるな」

その先輩は、少しばかり眠そうな声で東海林に言つた。

やっぱり、合宿に来てから全てがおかしくなっている、と東海林は思わざるを得なかった。

「秋沙汰先輩、これがワックスに見えますか？」

東海林は、自分の頭に被さっている、黄色くて細い、しかももう固くなりかけている麺をつまんだ。

秋沙汰先輩、秋沙汰あきさた 千華先輩ちかは、高校一年の先輩で、いつも眠そうな表情をしている。本当に眠いのかどうかは、東海林には分からない。それに、今の発言からして、やっぱりみんなどこかおかしくなっている様子だった。

聞いた秋沙汰先輩は、少しばかり首をかしげた。

「…違うのか？」

東海林は、さっきの行動が無駄になったことを悔やんだ。赤龍は、東海林の頭の臭いをかぐ。気持ちが悪い。

「東海林のワックスはラーメンの香りじゃ」
そんなワックスいららない。

東海林は心の中で思う。そもそも、東海林はワックスを使ったりはしない。面倒くさいし、そもそもつける意味がない。

「違います」

東海林は言った。

聞いた秋沙汰先輩は、ふーん、どこか物珍しそうに東海林の頭を見た。眠そうな視線ははずなのに、どことなくその視線には目力がある。

「…、分かった」

秋沙汰先輩は言った。きつとわかってない、東海林は確信した。
「何がですか」

東海林はバスクラを組み立てながら、バセットホーンを組み立てている秋沙汰先輩の方に言った。期待なんて、全くしていない。どうせどこか飛んだ発言をするに違いないからだ。

「東海林はなるとが好き」

「どこからその発想が出てきたんですか」

いろいろな意味で、分かったことが飛んでいる。

「そうなのか？東海林」

赤龍も、秋沙汰先輩の発言を真に受けている。そんな真に受けな

くてもいいから、と東海林は言いたいが、今言ったら絶対に秋沙汰先輩に不振がられる。

「違うのか？」

秋沙汰先輩は、東海林の方に視線を向ける。東海林はため息気味な口調で、秋沙汰先輩に言った。

「好きですけど、どこからその発想が湧いて出たのか教えてください」

バスクラが、殆ど完成した。東海林はそのマウスピース（吹き口）を取って、それだけでチューニング（音の高さを合わせる作業）を始める。チューナー（音の高さを細かく表示する機械）には、音が『ES』と表示されている。吹くのをやめてみると、ずっとその位置で固定されているように見える。あれ、どうなってるんだ？音が無いのに、音の高さを表示できるわけがない。

東海林はチューナーを振ってみる。

「…東海林の頭は、なるとでいっばいだな」

秋沙汰先輩は言った。

聞いた東海林は、秋沙汰先輩の方に視線を向ける。

「それ、本当なのか嘘なのか、先輩の頭の中なのかどれですか？」

そして秋沙汰先輩は、バセットホーンのマウスピースでチューニングを始める。そして「よし」と小さく言う。

「いやよしじゃなくて、先輩？」

東海林は秋沙汰先輩に行ってみる。秋沙汰先輩は面倒くさそうな表情で、「ん？」と東海林に視線を向ける。「ん、じゃなくて」と東海林は言った。

「俺の頭はなるとでいっばいって本当ですか？」

聞いた秋沙汰先輩は、「今は話しかけるな」とか言い始める。

「チューニングが終わったばかりだ」

秋沙汰先輩は言いながら、バセットホーンにマウスピースをつける。それを見た東海林は、秋沙汰先輩に言った。

「終わったんだからいいでしょ別に！」

秋沙汰先輩は、「何だ、うるさい障子だな」とか言ってくる。いや、何か違うからそれ、東海林は思う。

「だから、俺の頭の上に、なるとがいつぱいあるのかないのかどっちなんですか…?」

少しばかり疲れ気味に、東海林は言った。

そして、東海林は気づいた。今この場になるとがどうしたら聞いても、はつきり言って役に立たない。と言うか、そんな情報は意味がない。シャワーを浴びさえすれば、全て問題は解決するのだから。

「はい練習始めるよー」

とか、憶羅先輩は楽しそうに言ってきた。

聞いた東海林は、もうよく分からなくなってきた。この合宿は、東海林へのいじめなのか？東海林は頭の中で、ずっと考えていた。

「それじゃあ、チューニングから」

憶羅先輩は言うつと、チューナーを東海林に向ける。それを見た東海林は、ため息気味に、バスクラに息を入れた。

「シヨウジン君、」

憶羅先輩は言った。

聞いた東海林は、なんとなく嫌な予感がした。

相変わらず、赤龍は東海林の頭の臭いを、東海林にへばりつきながら嗅いでいる。気持ち悪い。

「はい…」

東海林はしぶしぶ、憶羅先輩に返事をした。きつとろくなことじやない。絶対にそうだ、それ以外なんてありえない。

「ちゃんとチューニングできる音で吹いて」

意味が分からない。

「…、それって、どういう意味ですか？」

東海林は、憶羅先輩に目を少し、面倒くさそうに細めた。それを聞いた憶羅先輩は、東海林の方に「だって、」と言いながらチューナーを向ける。

チューナーの液晶が、何かのゲームの画面のようになってる。

チューナーに見えるが、これはもしかしてゲームアンドウ チか？

「音の高さ出てこないんだもん」

憶羅先輩は言った。

東海林は思ったことを口にした。

「それ、本当にチューナーですか？」

聞いた憶羅先輩は、「え？」とか言いながらチューナーを弄り始める。急に妙な音楽が流れて、そして少し経つと、ファンファーレのようなものが聞こえてくる。

「このステージ簡単だなー」

絶対チューナーじゃない。

東海林は思うと、あれ？と思う。さっきまでチューナーは動いていた気がするのに、いつのまにかゲームアンド オ チになっている。妙だ、絶対におかしい。東海林は思った。しかも、東海林のチューナーは、そう言ったゲームの保護シールが張られているような、そんな状況になっている。

「先輩、」

東海林は憶羅先輩に言った。聞いた憶羅先輩は、東海林の方に視線を向ける。

「ん？何シヨウジン君？」

いつも思うが、シヨウジン君はおかしい。

東海林君 シヨウジクン シヨウジン シヨウジン+君 シヨウジン君。

短縮した意味がない。

そんなことはどうでもいい。

「どうやってチューニングするんですか？」

東海林は憶羅先輩に聞いた。

東海林は、ピコピコと言う音が、周りから聞こえてきているのに気が付いた。東海林はそれを聞くと、他の部員を見ている。みんな、チューナー(?)で遊ぼうのコーナーになっている。そもそも、チューナーはおもちゃではない。と言うことは、みんなが持っている

のはチューナーじゃなくてやっぱりゲームアンド オツ だ。

思うと、東海林はさっきの、自分のチューナーを取り出す。画面に何かが張ってある。東海林は画面の端に爪を軽く立てる。保護シールが、少しだけめくれる。

東海林は目を細めながら、その保護シールをはがした。

そして、『TUNER ON』と書かれたボタンを押してみる。なのに起動したのは、チューナーではなかった。

「…、はあ」

東海林はため息をついて、もう一度『TUNER ON』と書かれたボタンを押す。電源を切る。

「それじゃあ、今日は各自、自分の耳で合わせるってことで」

憶羅先輩は、軽くそう言った。

軽くそんなことを言われても、はつきり言って困る。耳で合わせろって、相当大変だぞ？

思いながら、東海林はそれに納得せざるを得なくなった。

みんな、チューナーで遊ぼうに夢中だった。

「それじゃあ、全員でチューニングの音」

憶羅先輩は声を張り上げた。それを聞いた東海林たちは、バスクラヤバセットホーン、クラリネットを構えた。

憶羅先輩は、普通にメトロノームを動かそうとする。

メトロノームが、目覚まし時計のごとく、けたたましいベルの音を鳴り渡らせた。

「う…」

東海林は思わず顔を歪める。他の奴らは、チューナーアンド ツチに夢中。

憶羅先輩は、すぐにメトロノームを止めた。そして、少し顔を笑ませて、東海林の方に視線を向けた。

東海林は、苦笑いをする気も起きなかった。

「…、今日は、機械を使わないほうがよさそうだね」

憶羅先輩は、妥当だった。

聞いた東海林は、数回、憶羅先輩に頷いた。

頭がかゆいのにも、もう東海林は慣れてきていた。東海林は思いながら、バスクラを拭いていた。憶羅先輩が撥で机をたたきながら、みんなにテンポを指示している。見た限りだと、撥も机も、「痛い！」とか「やめてくれ！」とか言いそうな雰囲気はない。まだいいかな？東海林は思った。

その時だった。

ガチャ、と、曾等先輩の顔がドアから覗いた。

「そろそろ合奏、全体で」

聞いた東海林たちは、『はい』と曾等先輩に言った。秋沙汰先輩と憶羅先輩は、「分かった」と「りょうかい」という間延びした返事だった。それを聞いた曾等先輩は、クラリネットの練習部屋から出て行く。

そして、東海林はため息をつきたくなってくる。合奏、ということとは、勿論清原先生も参加するということだ。メインは下滝先生ではあるが、清原先生も近くにいる。今の清原先生に合奏の指示なんてさせたら、「楽器を使って相手を撲殺しなさい」とか言いかねない。それをみんな真に受けて、きつと殺し合いが始まる。

「はあ……」

東海林はため息をついた。赤龍は東海林に抱き着きながら、「うむ」とか言っている。

「東海林、いい匂いじゃのー」

そう言う問題なのか？

東海林は心の底で、赤龍の方に疑問を抱いた。

憶羅先輩が、みんなにこう言った。

「それじゃあ、各自で合奏の場所に行つてねー」

それだけを言うと、もうパート練習は終わりになった。挨拶もな

しだ。

東海林は思うと、少しばかりのため息を、心の中に残しておいた。これは、みんなが殺し合いになっただら吐くでしょう。

東海林は楽譜をまとめながら、重い赤龍に抱かれて、心身ともに疲れを感じていた。

その時だった。

「大丈夫か？東海林」

そう言ったのは、隣の、バセットホーンを吹く秋沙汰先輩だった。聞いた東海林は、「あ、まあ」と小さく言った。

「少し…、疲れたって感じですかね」

東海林は小さく言った。

それを聞いた秋沙汰先輩は、「疲れた、か…」と小さく呟いた。

東海林はどこまでも、別な方向を向いているみんなに、ついて行けなくなりそうだった。しかも憶羅先輩はよく分からないし、それにチューナーは任 堂のゲームになるし。

もうさんざんだ。

東海林は思った。

「何か、思い悩むことでもあるのか？」

秋沙汰先輩は、東海林にそう質問してきた。

聞いた東海林は、少しばかり意外な感覚でそれを聞いた。「え…」と小さく言いながら、笑っている赤龍に抱かれ、秋沙汰先輩の方に視線を向けた。

秋沙汰先輩の視線は、あまりにもまともだった。

「…」

一瞬、言葉を失うほどまともだった。

しかし、と東海林は思った。

秋沙汰先輩は、こんな変な合宿の中でも、まだまともな方なのかもしれない。と言うか、クラリネットパートは比較的静かで、比較的普通だ。中身はチューナーアンドウツで遊ぶような奴かもしれないけど、まだいい方なのかもしれない。

話を通じるし。

東海林は思った。

「どうした？」

東海林は秋沙汰先輩の声を聞くと、一瞬の瞬きをする。「あ、いや…」東海林は言葉に困る。どう表現していいのか、全くと言っていいほどわからない。

「、悩みと言うか、何と言うか…、変と言うか、何だか…、その…」東海林はつぶやく。

それを聞いた秋沙汰先輩は、「そうか」と小さく呟く。そしてバセツトホーンを持って、憶羅先輩の方に歩いて行った。

「へ…？」

東海林は小さく呟いた。

何だっただんだ？今の。

思いながら、東海林は憶羅先輩と秋沙汰先輩の様子を見る。秋沙汰先輩が何かをひそひそと話すと、憶羅先輩は小さく笑う。そして、今度は憶羅先輩が秋沙汰先輩に、こしょこしょと何かを小さく話す。東海林は面倒くさくなって、チューナーを起動させる。勿論起動したのはチューナーアンド チ。

「東海林は、そんなアナログなゲームが好きなのかの」

赤龍が、東海林を抱きながら、東海林をあざけるような口調で言った。聞いた東海林は、もうどうでもよくなってきた。

「好きもきらいもない。もうはつきり言っつて、嫌な感覚しかせん」それを聞いた赤龍は、「嫌な感覚、とな？」と赤龍に言う。

東海林は、多分今赤龍に説明しても無駄だな、こいつも合宿の混沌に吞まれてるんだから、と思い、「ああ、ちよっとな」としか言わなかった。

赤龍は、小さく言った。

「ふーむ」

そして再び、東海林の頭の方に鼻を向ける。赤龍の鼻腔に、東海林だしのラーメンの香りが広がった。

東海林がいつもカップラーメンを食べているからか、東海林だけのラーメンの香りは、いい香りだった。

「うーむ、東海林ラーメンはいいのー」

聞いた東海林は、チューナーの電源を切って、譜面台の上に乗せた。そして立ち上がって、赤龍に言った。

「俺を勝手に食べ物にするな」

そして、譜面台を持つと、東海林はクラリネットの部屋から出て行った。

行く途中、香奈に会った。つまり香奈に会うということは、黄龍と会うということと同義だ。東海林は思いながら、「あ」と一瞬呟いた。

一気に、東海林の中で、カツと熱いものがこみあげてくる。

「あら、東海林君」

香奈は、楽しそうに微笑みながら、テナーサックスをストラップに提げていた。黄龍は少しだけ大人びた雰囲気を漂わせて、香奈について行く。

「や、やあ、奇遇だね、こんなところで会っただなんて…」

東海林は、片言になりかけながらも呟く。

聞いた香奈は、「そうだね！」と明るく言いながら、東海林の方に視線を向ける。香奈はいつも笑っている。東海林の前では、いつも笑っているような気がする。

それって、俺のことが好きってこと？

東海林は頭の中で、妙な方向に思考を持っていく。

「そう言えば、東海林君」

聞いた東海林は、香奈の方に視線を向ける。香奈はいつも通り、笑っている。何だか、笑っているようにしか見えないようにも見えないが、東海林はこの際気にしない。香奈さんが笑っているのを見るのが、俺の生き甲斐なんだ！

「なーにー？香奈さーん」

東海林は、赤面しかけた緩んだ表情を、香奈の方に向けた。香奈は、相変わらず微笑んでいるのかそうでないのかよく分からない笑みを、東海林の方に浮かべている。

「東海林君、ワックスつけてたっけ？」

聞いた東海林は、朗らかな緩んだ表情のまま、固まった。えっと、何々？このラーメンが、ワックス？本当にそう思うの？何でラーメンをかぶった悲惨な東海林っていう思考にならないの？

思いながら、東海林は小さく、香奈に言ってみた。

「…、えっと、ワックス、じゃないけど、これ、何か別の物に、見えない？」

東海林は香奈に聞いた。

聞いた赤龍は、「見える見える見えるぞ！」とか連呼する。そんなこと言われても、東海林は赤龍なんて当てる気はない。

香奈はそれを聞くと、「ワックスじゃないの？」と不思議がりながら、東海林に言った。と言うか、ワックスだと思うの方が、変だと思う。香奈さんが変だと言っているわけではない。つまり、ラーメンがワックスだなんて言う人がおかしいと言っているだけであって、香奈さんは決しておかしくはない。

「うん…、違う」

東海林は小さく言った。それが本当のことだったから。

香奈は聞くと、「うーん」と東海林の頭を見ながら悩み始める。

ほら、なるととか、のりとか、メンマとか麺とかが入ってるあれだよ！応援する代わりに、東海林は心の中で、香奈にヒントを与え続けた。

「何だと思う？」

香奈は分からなくなって、黄龍の方に視線を向けた。黄龍は聞くと、「これは…」と、大人びた口調で東海林に言った。

「Spaghettine！」

発音がよすぎて、東海林は困った。何で黄龍が、こんなに英語の発音がいいのか、それは、この合宿がおかしいからだ。そうだ、そ

うに違いない。

「そっか！」

香奈はうれしそうに、黄龍の方に言った。東海林は思う。黄龍つて、むやみやたらに英語を乱用する奴だったっけ？答えはNO！である。

「サンダルね！」

どこをどう聞いたらサンダルになる？

思いながら、東海林は「いいえ、ケフ アです」と、苦笑いに似た朗らかに緩んだ表情を香奈に向ける。「全く、すばげつとの活用さえ分からぬとは…」赤龍は嘲るように、香奈に小さく言った。勿論香奈には聞こえない。

「えー違うの？」

香奈は、少しばかり悲しそうに東海林に言った。悲しそうに言われても、サンダルでないものはサンダルでない。それは自然の摂理云々以前の問題だ。東海林は確信している。

「それじゃあ…」

香奈は考える。

東海林は少しじれつたくなって、「あー！」と声を上げる。「ついに壊れたの、」と赤龍。

「ほら、なるととかのりとかメンマとか麺とか味付け卵とか塩味の汁とかが入ってるあれだよ香奈さん！」

東海林は言った。それ以上言ったら、答えになってしまう。

聞いた香奈は、「あ！それもそうね！」と新感覚の新発見。今更か…？と東海林は思う。

「なると、ノリ、メンマ、麺、味付け卵…塩味…汁…」

何かが違う気がする。

東海林は思ったが、口出しはしない。今は香奈のターンだ。ずっと香奈さんのターンでいい、と東海林は思う。

「そっか！」

香奈は言った。

東海林は、どことなく安心したような気持ちで満たされかけた。

「そう、それだよ!」

香奈さんに言った。

聞いた香奈さんは、喜びながら「それね!」と東海林に言う。そして香奈さんが、口を開けようとす。

「あー、答えは言わなくていいよ香奈さん?」

東海林は香奈に、思いつきりそう言った。東海林はかなりあわてた様子で、香奈の方に視線を向けた。

聞いた香奈は、「えー?」と東海林に呟く。「何で?」

聞いた東海林は言った。

「ほら、よく言うじゃない。答えは自分の中にあるって言うキャッチフレーズ」

聞いた香奈は、「CMとかにありそうね」と笑う。

「でしょ?でももしここで香奈さんが答えを言ったら、そのキャッチフレーズを乱すことになるじゃない?」

東海林は言った。そして理解もしていた。自分が言っていることがどれだけ滅茶苦茶なのか。一番理解していた。

聞いた香奈は、少し困ったような、何かを考えるような表情をする。まさか、これが無茶な論だつて、ばれたのか?

東海林は心配した。

香奈の答えは、これだった。

「それもそうね…」

東海林の心の中で、杞憂と言つ言葉が浮かんできた。そう、つまりこれは杞憂だったわけだ。

その時だった。

「とつてもとつてもBADなboyだね、東海林」

英語交じりだけでも、非常に流暢な口調が、東海林の耳に突いた。東海林はそれを聞くと、ため息をつきたくなった。しかし、まだそんなことは出来ない。このため息は、楽器が血塗れるまでお預けの物だった。

それは、黄龍の声だった。と言うか、この流暢な英語と日本語の組み合わせは、今黄龍しかありえない。東海林は思った。

「…、はい？」

東海林は、なんとなく嫌な予感がしながら、黄龍の方に耳を傾けた。

黄龍は聞くと、東海林にこう言った。

「東海林は her の Opinion を Had better LISTEN よ！」

もう意味が分からない。

東海林は英語が、あまり得意ではない。そもそも、さっきの台詞、日本語よりも英語の方が多かった気がする。何でだ？

東海林は考えながら、目を細めた。

「だって、東海林君」

香奈は、笑顔でそう東海林に言った。今のを聞いて、香奈はおかしいと思わないのだろうか。東海林は不思議で仕方がなかった。と言うか、何で黄龍が英語をしゃべっているのか、東海林には全く理解が出来ない。

「だって、って言われてもな…」

東海林は困りながら、小さくそう言った。そんなことを言われても、はつきり言って困る。そもそも、さっきの黄龍の台詞の意味を、東海林は理解しきれていない。

「東海林、まさか何か、隠してはおらぬか？」

赤龍が何で今俺にそう言うんだ？

東海林は思いながら、赤龍の方に視線を向ける。赤龍は、まっすぐな視線を東海林に向けている。これが、東海林に抱き着いていなければ効果観面案だけだ。

「いや、そうじゃなくて英語が…」

東海林は言いかける。

香奈はそれを聞くと、「え…」と小さく東海林に言った。

「まさか東海林君、今の、英語に聞こえたの？」

もう意味が分からない。と言うか、英語以外の何なんだ。東海林は思う。

「あー、東海林のearはBrokenだな」

黄龍の言葉。なんとなくではあるが、今のは理解できた。つまり、東海林の耳は壊れている、みたいな感じだろう。

「へーそうなんだ」

香奈さんは、その黄龍の言葉に、何故か納得した。あーあ、と東海林は思う。今の言葉のどこに、納得要素が入っているのか、東海林には正直分からない。何だ、俺の耳が壊れたってことがそんなに納得要素満載か？

「東海林君の家って、暴君なんだね？」

香奈は言った。

へ？

意味が分からないんじゃない？ なった。東海林は心の中で思い、あえて訂正する。意味が分からないんじゃない。訳が分からないんだ。

「家が、暴君？」

おうむ返ししか、東海林には出来なかった。そもそも何だ？ 家が暴君って。東海林は考える。暴君な家なんて、東海林は見たことがなかった。穏便な家も、もしかしたらあるのだろうか。

「最先端の流行じゃな」

赤龍は、東海林に明るくそう言った。

は？

東海林は一瞬、意味が分からなくなる。何だ？ 最先端の流行？ もしかして、倒置法か？ 東海林は思いながら、考えてみる。

最先端の流行⇨最先端＋流行 流行＋最先端⇨流行の最先端

考えて分かるが、はつきり言っただけならそんなこと言われても困る。何だ？ 暴君な家が流行の最先端って。

東海林は思いながら、赤龍の言葉を、頭の中でまとめてみる。

暴君な家 流行の最先端 『東海林のearはBroken』

「あー、俺ちよっとお腹痛くなっけきちゃった」

嘘だ。

東海林は、もう話について行けないと断念した。と言うか、意味が分からない。話がもう通じない。

思いながら、いかにも腹が痛そうなのを見せる。実際、赤龍が強く抱きついてきているせい、腹が痛いことは腹が痛い。しかし、我慢できるレベルだ。十分に。

「え、大丈夫？」

香奈は心配そうに、東海林にそう聞いた。東海林は聞くと、「うーちよつと、えつと…、お花摘みに行っておかないと…」東海林は言う。確か、女の子はトイレのことを、お花摘みというはずだ。

「分かったわ、それじゃあライラックをお願いね」

意味が通じていない。東海林は思う。

ライラックって何だ？東海林は続けて思う。もしかして、トイレツトペーパーのこと？

思うと、東海林は自分の未熟さを知る。そうか、トイレツトペーパーの言い方までは知らなかったな。そうか、ライラックって言うのか。

「わかった、たくさん摘んでくるよ」

東海林は言った。

あからさまに腹を抱えて、「うー…」とか言っておきながら、東海林は二人に言った。

「それじゃあ、ちよつとお花摘みに行ってくるよ…」

東海林は言う、バスクラを持ちながら、トイレの方向に歩いて行った。

赤龍はそれを見ると、「大丈夫かの？」と東海林に言う。聞いた東海林は、「大丈夫だ」と、もう普通に帰っている。

「そもそも、腹はいたくない。トイレにもいかない」

東海林は赤龍に言いながら、合奏の部屋まで歩く。なんとなく、道のりが長く感じられたのは、気のせいではない。

「お花摘みじゃなかったのかの？」

聞いた東海林は、赤龍の常識のなさに困ってしまつてしまつ。全く、赤龍はお花摘みの意味が分かつてないのか、子供だな。

思いながら、東海林は赤龍に言った。

「赤龍、女の子っていうのは、何故かトイレのことをお花摘みって言つんだ。知らなかったのか？」

言ってみる。

聞いても、赤龍にはよく分からない。「初耳じゃ」と赤龍は言う。「それでは、ライラックと言うのは何なのじゃ？」

赤龍は、東海林に質問してみる。聞いた東海林は、知恵袋のようなノリで回答していく。

「きつと、トイレットペーパーのことだ。だから、トイレットペーパーをたくさん持ってきてつてことだと思つ」

聞いた赤龍は、更に疑問が湧いてくる。

「しかし東海林、香奈は何故トイレットペーパーに夢中なのじゃ？」

東海林は思つ。たくさん持ってきてと言つたからつて、だから夢中と言う結果にはつながらないだろう。

東海林は赤龍に言う。

「夢中じゃなくて、必要つてことだと思つけどな、俺は」

言つと、今度は別の疑問が、東海林の中で浮かび上がつてくる。

何で香奈さんは、そんなにトイレットペーパーが必要だったんだ？

そして、東海林の中で、ピコーンと閃き渡つた。

「そうか！」

東海林は声を張り上げた。

聞いた赤龍は、「うむ？」と言いながら、東海林から離れる。

「つまり香奈さんは、サックスの中に溜まつた水を、トイレットペーパーで拭きたかつたんだ。後で持つて行つてあげよつと」

東海林は言いながら、なんとなく楽しい気分になつた。頭の上に乗っているラーメンが気にならないくらい、愉快的感覚が東海林を埋め尽くしていった。

「うーむ…」

赤龍は言いながら考える。
やっぱり何か、違うような気がする。
そう思うが、赤龍はそれを、東海林に言う気にはなれなかった。

愉快的な気持ちだが、一気に崩れ去った。

「はあ……」

東海林は、練習中にため息をした。少しばかり大きめのため息を、東海林はあたりに放った。もしかしたら、まだラーメンだけが頭の上に乗っていた方が、良かったのかもしれない。本気で、東海林は思った。

東海林の頭が、つぶれたトマトで汚れていた。合奏中、トマトが飛んでくることなんてあるだろうか。東海林は考える。空前絶後。r冠前絶後。

東海林は、下滝先生の方に手を挙げた。「あの一……」と、力ない声で東海林は言った。

それを聞いた下滝先生は、東海林の方に視線を向ける。赤龍は、東海林の近くにはいない。黄龍や緑龍や青龍は、ちゃんと各々のところにいるのに、あいつだけどこにいるんだ。東海林は思った。

「……」

下滝先生は、寡黙だった。

東海林の方を、ただじつと、見つめていた。「えつと……、あの一……」東海林は言いながら、下滝先生が何かを言う瞬間を見計らう。普通、何でしょう、とかそう言ったことを言うはずだ。東海林は思っている。しかし、下滝先生は、口を全く動かさない。そもそも、目を全く動かしていない。

「……、えつと……」

東海林は言う。

下滝先生は、東海林の方にじつと目を合わせている。東海林の視

界には、下滝先生の円くて細い目が、印象的だった。活気があるの
かないのか、よく分からない目。

あきらめよう。

「…やっぱりいいです」

東海林は言いながら、手を自分の膝の方に戻した。やっぱり、あ
きらめも肝心だよな。

「何でしょう…」

下滝先生の、静かなゆっくりとした声。

「もっと早くにその声が聞きたかったです…」

東海林は沈みながら、頭の上から赤い汁が垂れてきているのに気
付く。しかし、今は拭くものがない。スワブは管内の水分を取るた
めの物だ。頭から垂れてきたトマトの汁になんて使えない。

東海林は、下滝先生に尋ねた。

「あの、何故かトマトが俺の頭に命中したから、先に風呂入っても
いいですか？」

「だめです」

即答だった。

「何でさつきはあんなに遅かったのに、今回はそんなに早いです
か！」

東海林は下滝先生に言った。

その時だった。

隣で、東海林の肩に手を置いている人物がいた。それは、バセツ
トホーンの秋沙汰先輩だった。

秋沙汰先輩は、少し眠そうな表情をしながら、東海林の方に目を
向ける。

「がんばれ」

と、東海林に小さく言った。

考えた東海林は、はっとなった。

そうだ、まだ俺は頑張れる。まだ頑張れる！別に死にそうなわけ
じゃないんだから、トマトやラーメンが直撃したぐらい何だってん

だ。そのくらい普通に乗り越えられるじゃないか！

東海林は思いながら、「はい！」と秋沙汰先輩に、輝いた視線を送った。

そして、東海林の方に、どこかからトマトが投げられてくる。そしてそれは見事東海林にぶつかる。

べちゃ ぐちゃ びちよ

しかも一つではない。

東海林の体が、真っ赤になってくる。トマトの汁が、東海林の体にまわりついてくる。さすがの秋沙汰先輩も、東海林に触ろうとはしない。

「がんばれ」

秋沙汰先輩が、小さく東海林にエールを送る。

そうだ、まだトマトだからいいんだ。まだ変なものを投げつけられてないから、まだまだ大丈夫。あと百個トマトを投げつけられても大丈夫だ。

「はい、頑張ります！」

東海林は言った。

「それじゃあ、さっきのところ」

下滝先生は、普通にタクト代わりの撥を、振り下ろそうとしている。合奏中にトマトが飛んでくることは、そんなに普通な出来事なのだろうか。東海林は考える。そう言えば、みんな俺に対して、反応薄い気がする。東海林は思った。

まあいいさ。

東海林は考える。こういうのは、ポジティブなのが一番だ。思いながら、東海林はバスクラを啜えた。

そして、真っ赤なまま指揮に合わせる。真っ赤なままで、東海林は楽しそうにバスクラを吹く。そう、ポジティブシンキングだ。東海林は思った。

トマトは飛んでは来なかった。別に、他の物も、東海林に飛んできたりはしなかった。

這ってきた蟻が、東海林の近くにいるの間にかたかっていた。しかし、東海林は気づいても無視してみる。

無視してみた。

わさわさわさ、と東海林の足元から胸にかけて、音がした。

つまり、一瞬にして東海林の体は、蟻まみれになった。殆ど真っ黒だった。

「？あー！ー！！」

東海林は絶叫しながら、バスクラを持ったままあたりを駆け回る。不思議なことに、東海林のことを気にしている奴が一人もない。何で、何で誰も気にならないんだ。東海林は逆に不思議でならなかった。

「そこ、もうちょっと静かに」

いきなり下滝先生が指揮をやめて、東海林の方にそう言った。聞いた東海林は、蟻に未だにたかられながら、下滝先生の方に視線を向ける。誰一人として、東海林の異変には気付かない。と言うか、東海林以外の全員が、何かおかしくなった、と言う感覚だろう。東海林は思った。

何かがおかしい。

「あの、先生」

東海林はバスクラを持ちながら、下滝先生に言った。

聞いた下滝先生は、その声を聞くと、東海林の方に視線を向けた。東海林は、真っ黒に近い顔で、下滝先生に言った。あ、やばい、喋ると蟻が口の中に入ってきてそう。

「……」

やはり、下滝先生は寡黙だった。でも、話を聞いていないわけではない。それを東海林は知っていた。

東海林はそれを見ると、下滝先生に言った。

「俺、蟻にたかられて、ちょっと痛いんですけど、病院行ってもいいですか？」

そう言った瞬間だった。

下滝先生が、視線を変えずに言った。

「ごめん、聞いてなかった」

聞いていたはずだったのに。

東海林は思いながら、そうか、と納得してみた。もしかしたら、下滝先生と話すときは必ず、下滝先生から何かを言わせないと、こちらからの話はシャットアウトされるかもしれない。と言うかされた。

つまり、ここからは東海林のターン。

「先生、俺、蟻にたかられたから、病院に行ってきたでもいいですか」
東海林は言った。

聞いた下滝先生は、どこまでも冷静で、どこまでも普通の視線で、東海林の方にこう言った。

「だめです」

はあ…。

東海林はため息を小さくついた。そうか、どうせ俺なんて、蟻にたかられて当然の人間なんだ。どうせ俺なんて、パンツの中に蟻が入り込んでも、何も思われない人間なんだ。どうせ、俺なんか…。

東海林は思いながら、椅子に戻る。蟻はどんどんと、東海林にたかっていく。不思議なことに、バスクラには一切蟻がたかっていない。東海林は考える。もしかして楽器って、防虫作用みたいなものがあるのか？

東海林は思いながら、「はあ…」ともう一度小さく言ってみる。全く、何でこんなことになってるんだ。東海林は思った。

そして、バスクラに手が置かれた。体中真っ赤になったかと思ったら、今度は真っ黒になった東海林を慰める、同情の手だった。

「がんばれ」

秋沙汰先輩は、普通に東海林にそう言った。

そんなことをはつきりと言われても困る。東海林は思い、小さく秋沙汰先輩に、こう答えてみた。

「無理です」

東海林は、ポジティブシンキングなんて存在しないことに、今気が付いた。

ベットは殺されると生き返る

ホテルの入浴場は広く、たくさんの湯船と、たくさんのシャワーがあった。普通の風呂はもちろん、温泉効果のある風呂や、露天風呂に、本物のビール風呂まであった。やっぱり、と東海林は思った。この合宿は、何かおかしい。

やっと入浴の時間になったから、東海林はほっとしていた。東海林は自分の体を素早くシャワーで洗い、すぐにどの湯船につかるうか考えた。まず普通の湯船を見てみると、そこにあるのはいたって普通の、ホテルの風呂だった。

その湯船には、すでに先客がいた。ただの先客だったら、まだよかったかもしれない。東海林は思いながら、ため息をつきたくなる。しかしそれは出来ない。

「風呂の時間になったから飛んできたというのの…」

赤龍が近くで、東海林に愚痴を言うように、そう呟いた。東海林はそれを聞くと、残った泡をシャワーで落としながら、赤龍の方を見た。赤龍は、尻尾をごしごしと洗っている。

「雌がいないではないか」

赤龍は言った。

聞いた東海林は、目を細めた。ここには東海林と赤龍が入れる、と言うことは勿論、男（雄）湯だ。雄湯と言うのかは分からないが、とりあえずそんな感じだ。ところで、赤龍って雄だよな…？

「当たり前だろ、赤龍。ここは男湯だぞ」

東海林は言った。

それを聞いた赤龍は、「全く」と小さく呟く。何が全く何だか。「天野下も気が利かぬの。混浴のないホテルを選ぶなど」

聞いた東海林は、目を細める。

雌、と言ったら、東海林には黄龍しか思いつかない。赤龍はかなり真面目そうな顔をして、うーむ、とか考えている。赤龍が、い

つもより男らしく見える。と言うか、雄らしく？

「混浴なんて選ぶか学校が」

そう言いながら、東海林は湯船の方に視線を向ける。もう既に湯船には、妙な客がいる。

いつも通りの青い青龍と、雄大だ。青龍はぶくぶくぶくと沈み、雄大は「うほほーい」とか言いながら青龍の周りを湯船の中で回っている。

温泉効果のある湯船には、緑龍と大介が、のほほんとしていた。二人は渋い趣味と言うか、何と言うか、東海林は思う。まあ、人それぞれだし、それに温泉つて、気持ちがいいしね。

しかも露天には、和山が一人で絶景を楽しんでいる。そもそも、何で一人で楽しんでいるのか、全く分からない。まさか、あそこで他人に知ることが許されない何かでもしているというのか？

東海林は考えた。

「しかし、世の中には混浴と言う物がある。それを有効活用せねばな」

聞いた東海林は、お前な、と赤龍に言う。と言うか、東海林は赤龍の方に鋭い視線を向ける。

赤龍は、どこかでれでれになりながら、さっきの雄らしい顔は吹っ飛んでいた。目が足らんとしているし、口は半開きだし、涎までてるし、微妙に翼が上下している。

全く、なんなんだこいつは。

東海林は思いながら、そう言えばと思う。そもそも龍は服を着ない。だから混浴だろうが何だろうが、龍にとってはあまり関係がない気がする。人は服を着るが、龍はそのままだ。それに、赤龍の場合は、風呂に入った時は腰にタオルを巻いているから、普通の時よりも服を着ている状態に近い。東海林は見ていて思った。まあ隠すものがまずないが。

「でも、龍つてあんまり、混浴とか混浴じゃないとか、あんま関係ないんじゃないか？」

赤龍は言った。

聞いた東海林は、は？と思う。何が？どこら辺が？どうしてそうなるの？

赤龍は、口周りの涎を吹いて、東海林の方に視線を向けた。赤龍は、まっすぐな視線で、東海林の方に見つめていた。

「つまり、もし混浴場が広くて、飛べる高さになれば、そこで交飛翔が…」

言った瞬間だった。

どこから出てきたのか、青龍が一瞬にして赤龍の目の前まで現れたかと思うと、普通の湯船まで一瞬にして連れて行く。「な！」と赤龍は言いながら、青龍の思惑に流されていく。

赤龍は青龍に、頭を水中に押し込まれた。赤龍はわたわたわたわたと、もがき苦しんでいる。しかも、青龍は何かを呟いている。

「：1・4142135623730950488016887
242096980785696718753769480721
6679907324784…」

何だろう、これ、呪詛？

東海林は思いながら、思わずそれを聞いて思う。数字だ。数字と言うか、これはもしかして、2か？しかもかなり速い。言うのが速すぎる。まさか、全部暗記しているのか？まさか、無理数を全部覚えていても言うのか？？

「な、なんなんだ…」

東海林は、それを見て呟くしかできなかった。と言うか、それ以外のことを、この状況下でできるといえるのはすごいかもしれない。

「あ、殺じーん！」

近くで、楽しそうに雄大が言った。と言うか、このままだと赤龍死ぬんじゃないか？東海林はなんとなく考えてみる。そう言えば、ポツ　ーっておいしいよね！。

「この場合は、正確には*『龍』なんじゃないか？」

いきなり、大介がまともなのかまともでないのか、そんなこと

を言ってくる。そして、温泉のお湯を少しだけ飲んでみる。「うーん、緑茶の風味だな」とか大介は言ってみる。何だ、風呂が緑茶風味って。

「俺は、今すごいものを見ています」

和山は、どこかで聞いたような台詞を、野外から野内に呟いてくる。しかし、どこか向いている方向が違う気がする。青龍が赤龍を水に沈めて*している方向ではない。露天風呂の中だ。

「なんだか賑やかだね」

拳句の果てには、もう緑龍は全く何も関係ないという風な顔で、のほほんとお湯の中に浸かっている。「あー、緑茶風味」とか、緑龍も言ってみる。「だよなー、これ緑茶だろ？」と、大介が緑龍に言う。

「七十三、七十四、七十五」

雄大は、赤龍の生存をカウントしている。これでポイントが高かったら、東海林に何か、豪華賞品でももらえるのだろうか。東海林はなんとなく思った。

「621070388503875343276415727」
青龍がその何故か 2を言い終えると、赤龍はじたばたとしなくなる。もう殆ど動かなくなって、プク…、と小さな泡が、浮かんだだけだった。つまり、赤龍は*された。青龍によつて。

「あーあ、やっちゃったよールートニクン！」

雄大は、どこか楽しそうにそう言った。それを聞いた青龍は、赤龍を細い目で見つめる。赤龍は、ぷかぷかと湯船の水面上で浮いている。

「いい湯だなー」

大介は言う。

「緑っぽいねー」

緑龍が言う。

「やばい…、萎える…」

和山が、外からボソッとそう言った。

東海林は赤龍を見ると、はあ……とため息をついた。そして、なんとなく、赤龍の*龍に、いい感覚を覚えた。

「これで、いつでもため息ができる……」

東海林は小さく、赤龍に言った。赤龍はどこまでも、目をぐるぐるにさせて、水中で目を回していた。

「……………」

赤龍は、鼻血を出した。

その時、声が出たことを東海林は覚えている。

「ねー青龍、知ってる？はなぢドラゴンの意味」

青龍は、全く興味がない様子で、湯船の赤くなっているところを避けながら、お湯の中に浸かった。

それじゃあ、と東海林は思った。

「俺も風呂入るか」

そう思いながら、湯船の方に歩いて行った。

どうやら、ホテル代をケチったわけではない様子だった。東海林は夕食の内容を見て思った。と言うか、何だこの雲泥の差は。東海林は見ながら、とことんそう思った。

「みなさん、行儀よく、ちゃんとナイフとフォークを使いましょう」

清原先生が、そうみんなに言った。それが意味するものを、はっきり言って東海林は理解できない。と言うか、今の東海林に、他の人の意志が分かるわけがなかった。

夕食は、豪華なステーキだった。しかも、お替りは自由で、昼食の時と同じように、隅の方にたくさんステーキとご飯が置いてあった。丁寧にも、添えつけの野菜までちゃんとそこには健在だった。

赤龍（蘇生バージョン）が、何故か用意されている赤龍の分のステーキを、ペロツと食べる。東海林は赤龍を見ていて思う。

「お前、よく生きてられるよな」

東海林は赤龍の方を見て言った。赤龍は、両方の鼻に少しばか

り赤く染まったティッシュを詰めて、東海林の方に視線を向けた。東海林は、なんとなく赤龍の間抜けさが、倍增されたような気がしてならなかった。

「勿論じゃ、あんなもので赤龍が死ぬはずがない」

さつき、赤龍とか書いてあつたような気がするの、東海林の気のせいかな。きっとそうだ、そうに違いない。東海林は思った。

「僕が蘇生させたんですよー東海林さん」

緑龍が、今滅茶苦茶なことを言った気がするが、特に気にしないとする。

東海林はあたりを見回した。あたりには、清原先生がしゃべっているしゃべっていないにかかわらず、堂々とゲームをやったり、「ヤベ萌」とか言ったりしている奴がいる。しかも、やはり大介は「王」カードを確認している。そんなにこいつ、戯好きだつたっけ？東海林は考える。

「と言うことで、コツク長の人に、挨拶をもらいたいと思います。それではみなさん、大きな声で、よんでみましょう！」

何だ、俺らはデパートの屋上でやってるヒーローものを見に来た子供か？

東海林は思いながら、清原先生の方に視線を向けた。

その瞬間、みんな真剣な表情で、清原先生の方に視線を向ける。みんな、目を輝かせているように見えるのは、きっと東海林の気のせいではない。

「コツク長！」

清原先生が、声を張り上げた。

「コツクちよー！」

東海林以外のほぼ全員が、ためらわず声を張り上げた。その声は、遠く遠くのそのまた遠くの台所星までひびきわたる。

そして、出てきたのは、無精ひげのおっさん。

「えー、みなさん、こんにちは」

一言、

?東海林は考えた。

「昼のあれは、少々お見苦しかったかもしれませんが、一度コック全員を解雇して、それから雇い直したので、もう安心です」

嘘だ。安心じゃない。それに、何だそのすぐに嘘だっって見破られるような遠回りな謝罪は。

東海林は心の中で思った。思うだけで、口に出そうとはしなかった。出したところで、はっきり言っこの場では無駄だ。それが東海林には、はっきりと分かっていた。

「と言うことなので、夕食を、とくとお楽しみください」

コック長は言っと、清原先生の方に一度、頭を下げた。

それを見た清原先生は、コック長に頷く。そして東海林たちの方に視線を向けると、「はい拍手!」と声を張り上げる。上がる拍手に混じって、『ひゅー!』『イエエーイ!』『コック長最高!』『マジブギヤー!』とか聞こえてくる。最後のは一体なんだったのだろうか。東海林は思った。

「それでは、」

清原先生は言った。今度はちゃんと手を重ねているので、きつと本命の、食べるときの挨拶だ。東海林は思った。

それが間違いだった。

「開始!」

そう、これがまさに地獄絵図と言う物だった。

食べ物は飛ばなかった。今回言われたことはこうだ。今回はちゃんと行儀よく、ナイフとフォークを使いましょう。

使いたくねーよ!

東海林は心の中で、そう叫んだ。しかし、それは東海林の心の中だけだった。あくまで、それは東海林だけだ。

他の部員は立ち上がると、『勝負だ!』とか『決闘を申し込む!』とか『デュエル!』とか言う。

そして赤龍も。

「青龍、あの時、赤龍を殺したな!」

赤龍は青龍に言う。何と言うアニメ的な台詞だろう。

それを聞いた青龍は、目を細めて赤龍の方に視線を向けた。そして、小さく口を開く。

「…、祇園精舎の鐘の声」

こいつはこいつで何を言ってるんだ。

東海林は思いながら、はぁ、と小さくため息をついた。周りの、カッ！とかキンッ！とか言う食器のこすれる音で、東海林のため息は赤龍に届かない。

全く、と東海林は思う。

その時だった。

「東海林君」

その声が、東海林の背後で聞こえた。東海林はこんなことを知っている。こういう場合、後ろを振り向いたら、死亡フラグが立つ。死亡フラグが立 ました、みたいな感じだ。

東海林は、その声の主、香奈に、後ろを振り向かずに行った。

「…、何…、香奈さん」

聞いた香奈は、東海林に続ける。「私、東海林君と殺し合いしたい！」と、意味の分からない単語を並べる。ちよつと待った、俺と殺し合いがしたい？

考える。

そして、一瞬の殺気。

東海林はナイフを持って、後ろを振り返る。後ろに居るのは、フォークを持った香奈だった。香奈は、いつも通りの笑顔で東海林の方に向いている。「ね？」と、香奈は東海林にねだってくる。

「ちよつと待って香奈さん、そう言う物騒なことに流されちゃだめだよ。やっぱり、自分でいろいろと理解しないと。だから…」

東海林はあわてながら説明をする。聞いた香奈は、東海林に歯止めをかける。「でも…」

「私、東海林君と殺しあって、愛を確かめたいのよ」

どこかで聞いた台詞。

思いながら、東海林は涙目になりながら笑う。

「だめだよ香奈さんそんなのに流されちゃー」

そして、香奈は笑顔でフォークを振り上げる。そして東海林に突き刺そうとする、ちよつと待てちよつと待て、東海林は思いながら、勢いよく避ける。そして、何故か東海林の向いている方の全員が、東海林の方へと視線を向ける。その視線は、まさに『殺してあげる』と東海林に言っている。

東海林は後ろに退く。

その時、赤龍の背中に少しぶつかつた。東海林は分かつたのだ、感覚的に、これが赤龍の背中だと。

「赤龍、」

東海林は言う。

「東海林…」

赤龍は言った。

「お前の方に、敵、何人くらいいる？」

東海林は聞いた。

それを聞いた赤龍は、フォークとナイフを両手に持って、あたりを見た。

「たくさんじゃ」

聞いた東海林に、いい考えがあつた。

「いいか、赤龍。俺たちは一心同体だ。だから、お前に背中をゆだねる。だから、俺にお前の背中をゆだねさせてくれ」

聞いた赤龍は、東海林の方に一瞬視線を向ける。

東海林には確信があつた。もしそうすれば、ここから先、部員を張り倒して、元凶である清原先生の方へと道が開ける、と。

その瞬間だつた。

「まさか…、東海林…」

赤龍が、東海林に言った。

へ？

東海林が思つた瞬間だつた。

赤龍が東海林の方に視線を向けた。それだけでも、はつきり言
つて意味が分からない。さっきの東海林の言っていたことを、赤龍
は理解していなかったのか？東海林は考えた。

違う。

「東海林は赤龍の背中を守るふりをして、赤龍を殺*うという算
段なのか？」

まーさーかーのー新展開ー。しかも『*』の位置が微妙に違
うし。

東海林は自分を皮肉するように、そう心の中で思った。

「そんなわけないだろ…」

言つた瞬間に、東海林は確信した。

東海林の周りには、敵しかいなくなっていたのだ。敵しか、東
海林の目の前にはいなかった。と言うことは、どういうことか。

つまり 死亡フラ が立ちました。

あーあ、俺死ぬのか。

東海林は思いながら、ため息気味にこつ小さく呟いた。

「我が人生に一点の悔いなし」

そして、東海林は…

ペットは殺されると生き返るとはよく言つたもので、東海林も
何とか生き返る事が出来た。あれ…？ちょっと待てよ…。と言つこ
とは俺は、一体誰のペットなんだ？

東海林は思った。そして、赤龍の方に視線を向けてみた。赤龍
は合奏中の部屋の中で、背中を壁につけながら腕を組んでいた。そ
して、悠々と音楽を堪能している。東海林は逆だ。東海林は、苦痛
にさいなまれながら、音符をひたすらに吹き鳴らしている。よくこ
んなギャップで、あいつは悠々としてられるな。東海林は赤龍を見
ながら思った。まあ、赤龍だから、そう言えなくもなかった。

東海林は、若干ため息気味にバスクラに息を吹き込んだ。バスクラの中に、東海林のため息が入っていく。そしてそれが、音となつて出て行く。

つまり、そう言うことだ。

赤龍は、東海林の方に、カツと視線をきつくした。東海林はその圧倒的な視線に、思わず一瞬指を止めた。

東海林は何とか演奏を続けながら、赤龍の方に視線を向ける。

赤龍は、東海林に言う。

「……………」

ため息は、厳禁じゃ。

東海林は、使えもしない読唇術で、何とか赤龍の唇を読む事が出来た。

赤龍つて、どうやってため息を認識してるんだ？はあ、つていう音じゃないのか？もしかして、本物の読心術で心の中のため息まで認識するのか？

雑念だった。

その時、下滝先生が、撥を譜面台替わりの亀の甲羅に叩きつけた。ちよつと待て。

「そこ、もつとテヌート」

の前に、何か補足説明すべきことがあるんじゃないか？

東海林はその光景を見ながら、思わず思う。この小説の作者、誰かに妨害とか脅迫されてるのか？『亀を出さなきゃ、お前のをるぞ』とか。

ないないない。

東海林は思った。

『はい』

みんなは、ちゃんと返事をする。それを聞いた東海林は、その反応は普通すぎておかしいと思う。もつと何か、妙なリアクションが必要だ。あるいはもつと、驚くような感覚。

東海林は驚いた。

それは亀の甲羅なんて生易しい物じゃなかった。それは亀に見せかけた、亀の甲羅を背負った青龍だった。

青龍は四つん這いになって、辺りに首を伸ばして見つめている。やっぱり、世界がどうかしちやってる。東海林は思った。

「…、古池や、蛙飛び込む、水の音」

そして、一句を読む。

おかしい。何かがおかしい。と言うか青龍がおかしい。東海林は思った。そもそも、みんなにはあの青龍が見えているはずがないから、亀の甲羅が浮いているように見えるはずだ。つまりは、超常現象だ。なのに、みんな淡々と練習をしている。まさか、指揮をして甲羅をたたいている下滝先生も、青龍の存在に気付いていない？

東海林は思った。

「それじゃあ、一、二、三、四ッ」

下滝先生は、いたって普通としか言いようのない反応を示す。つまり、異常な世界で起きる以上で普通な出来事、と言うことだ。思った東海林自身、自分の思ったことが全く分からなかった。

仕方がなく、東海林はバスクラを吹き鳴らす。それ以外、東海林に道なんてものはない。

東海林はバスクラに、息を吹き込んだ。その時だった。

おかしい、と東海林は思った。

バスクラのベル（音が出るラッパ状の場所）から、小さな、ふわふわとした動物が顔をのぞかせたのだ。

ん？

東海林は思いながらも、自分のバスクラを吹き鳴らす。そしてその動物が、小さな茶色いリスだと気付く。しかもシマリス。

シマリスはすぐに東海林のバスクラから飛び出して駆け出していく。そして、みんなの足元をくぐっていく。

…？

思った瞬間だった。

東海林が音を一つ鳴らす度に、バスクラのベルから、どんどん

どんと、茶色くて似たり寄つたりのシマリスが飛び出てきた。

「…！ぶええええ…?!」

東海林はいろいろな意味で絶叫した。

部屋中が、シマリスだらけになった。茶色くて、小さくて、かわいシマリスも、こんなに大量にいるとただの鬱陶しい害獣かもしれない。東海林は心のどこかでそう思った。

東海林は、下滝先生が指揮を止めるのを見る。そうだろう、流石にこのシマリスには反応するよな、流石に。

そう思いながら、東海林は下滝先生の方に期待のまなざしを送る。

無駄に終わる。

「そこ、タイとスタツカート」

もうこの世は終わりだ、おしまいだよ。

東海林は心の底から、叫んでやりたかった。

東海林は仕方がなく、目を細めながら手を挙げた。東海林のバスクラの中からは、未だに茶色くてかわいくて、鬱陶しい量産型シマリスが生産されていく。

「先生…」

東海林はすこし、やつれ気味の声でそう言った。それを聞いた下滝先生は、東海林の方に視線を向ける。

「……、」

下滝先生は、こんなシマリス地獄の中にも、どこまでも寡黙だった。もしかしてこの先生、何か面白いことがあっても一人で黙々としてるタイプか？東海林は、改めて実感したかもしれない。

「あの、シマリスが俺のベルから大量発生して…」
言いかけた、その時だった。

「シマリスをバスクラから出さないでください」

「いや、そんなこと言われても…、」

東海林は困る。東海林自身、バスクラからシマリスを出すようなことはしていないし、バスクラの中にシマリスを隠していたわけ

でもない。もし隠していたら、そもそもバスクラの管内がパンパンに詰まって、音が出ないはずなんだけどな。

「…、それで」

下滝先生が、東海林に冷静なまなざしを送る。

逆に冷静すぎて、東海林は困る。そもそも、みんなの反応がどこか冷たい。何だろう、この虚無感と焦燥感の間みたいな感覚は。

「…、それで、害虫駆除業者に電話…」

言いかけた、その時だった。

「だめです」

それは、合宿中の常套句の一つだった。

聞いた東海林は、ため息気味に吐息を吐くと、下滝先生の方に、少しやつれたような、そんな視線を向ける。

「…ですよね…」

全く、どうにかしそうだ。東海林は思った。そもそも、東海林自身どこがおかしくなっているような気もしくない。しかし、何故だろう。東海林は思う。東海林自身はよく分かっているのに、周りが全く、その変化に気付いていない、と言っべきだろうか。何だろう。

東海林は思った。思うしかできなかった。

このシマリスも、本気でどこから来たんだ？まさか次元を超えてやってきたなんて言うなよ。東海林はシマリスを睨みつける。

そもそも、この世の法則が入り乱れたような現象が起こりすぎている。東海林は思う。そもそも龍がいる時点でどうかとも思うが、それ以上に、何かがおかしくなっている。何かがおかしい、絶対におかしい。断言できる。絶対に何かが壊れている。

東海林は、バスクラを吹くかどうか迷った。拳句、吹き真似をすることにした。

それは、寝る時間になっても変わらなかった。

東海林の部屋は、畳の部屋でボロっちくって、もう既に東海林

の眠っている場所は、イタで補強された畳の上だった。そもそも、この時すでにおかしかったんだ。東海林は思いながら、真つ暗な天井を見上げる。天井は廊下と違い木できていて、日本風と言えば日本風なつくりをしていた。と言うか、これってただの旅館じゃないのか？

東海林は、赤龍がいないことに気が付いていた。しかし、そんなことはこの際、はつきり言ってもよかった。赤龍は赤龍でしっかりしている。この合宿になっても、それは変わっていない。東海林はそう信じている。と言うかそうでないと身が持たない。東海林は思うと、ため息を一度ついた。

そもそも、本当に何なんだ？

東海林は思った。赤龍と言い、青龍と言い雄大と言い大介と言い緑龍と言い、今エロゲをやっている和山と言い、本当に、どうしちまつたんだ？

何故か、疑問と焦燥が、絡み合ったような感覚だった。それが東海林には、咽かえるような気分しか起こらなかった。

「…！こほ、こほ…」

東海林は本当に咽た。と言うか、東海林はクーラーの巻き上げる埃の濃さに、咽かえた。あんな豪華なホテルの一室が、こんな陳腐なつくりをしているはずがない。あれはただの見かけだましかないはずだ。東海林は思うのだが、今見ているこれが、現実ではないかと思ひ知らされる。

もしこのままだったら、どうしようか。

東海林は思った。

もしかしたら、東海林の中で抱えきれない何かが、あふれかえるかもしれない。そうしたら東海林は、生きることの意味を見いだせなくなるかもしれない。

押し入れの中で、和山の『…やべ… れる…』と言う声が聞こえてくる。それも、今となっては東海林には、あまりにも居心地の悪さを増加させていく。あまりにも、東海林の住み慣れている世界

とは、色々な物が超越しきっている。

天井には、普通に木でできた梁で支えられていて、普通にまっくろくすけがうごめいている様子にも見える。何だろっ、東海林は思う。

おかしいんじゃない。

おかしいのではなくて、歪んでいるのだ。東海林は思った。

東海林は覚えていた。憶羅先輩が、東海林の正気に気付いた時のことを、東海林は覚えていた。あの表情は確実なものだった。

やっぱり、憶羅先輩が何かを知ってるんだ。

東海林は、心の中で納得した。そして、小さく吐息を吐いた。

もし、明日またこの世界の続きが、東海林の目の前に広がっていたら、東海林は憶羅先輩に、色々なことを問いただすでしょう。

東海林は決めると、自分のまぶたの裏を眺めた。その時、どこから音が聞こえてきたのは、恐らく聞き間違いではない。

それは、バスロンの音だった。

どこの部屋からかなんて分からないが、その音の主がだれかなんてことは、はっきりと理解する事が出来た。

バスロン 雄大。

つまり、そう言うことだ。

小さな声まで聞こえてきた。

『…、夜…、『檻厭吐救荒』』

何かが違う。

東海林は心の中で、なんとなく居心地の悪さが増したような、そんな歪みが広がっていることに気付いた。

食堂だった。そこは、下滝先生や清原先生も寝静まった場所だった。

そこには、五人の誰かがいた。誰か、なんてはつきり言ってみ

てもわからない。見たってわかりはしない。

そもそも、人ではなかった。

人と言うよりは、人と獣を足して二で割ったような、そんな容貌をした誰かがいた。つまりは、そういうことだった。

「集まったな」

「ごつごつした、茶色の蜥蜴のような奴が、口を開いた。

「もう、全員眠ってるな」

それは、真っ黒な豹が、その茶色の蜥蜴に言った。聞いた茶色の蜥蜴は、「そうか」と小さく呟く。

あたりには、寝息に似た音しか聞こえない。これが、この滅茶苦茶な中での、唯一の静寂、と言うことだろうか。茶色の蜥蜴は考えた。それほどまでに、ここは歪んでいる、と言うことだ。

そして、灰色の蝙蝠のような様相をした人物が、声をはさんだ。

「ケツ…、くツだらねーな。いちいち隠れて会議だなんてよ」

それを聞いた黒豹が、その蝙蝠に言った。

「そうでないと、大変なことになる…」

少しばかり、目がさえているようだった。その黒豹は、心の中でそう思った。

ここにいる奴らは、恐らく全員目がさえているはずだ。その黒豹は思いながら、辺りに目を凝らした。

「そうだよ、だってさすがに、人様に見せられるものじゃないよ」

近くにいる、堂々たる鷲が言った。堂々たる割には、どこかその口調は穏便すぎる気がしなくもない。

「でも、会議するってことはねー」

もう一人、黒い狼が言った。

それを聞いた四人（四匹）は、その方向に視線を向けた。そこには、目をどこか輝かせた、黒い狼がいた。

真っ暗な食堂の中でも、よく見える。三人（三匹）は思った。

鷲は、あまりよく見えなかったが、輪郭ぐらいは見えた。

「ちゃんと、情報が集まったってことなんだよー」

その狼は言った。

聞いた蜥蜴は、狼の方に視線を向ける。そしてこう、質問するように言った。

「一体何が、原因だったんだ…？」

それを聞いた狼は、「うんとね」と言いながら、窓の方に視線を向けた。

それを見た四人（四匹）は、窓の外に視線を向ける。窓の外には満月が昇っていて、電灯もこの辺には少なく、非常によく辺りが見えた。

「あそこ、」

狼は、前肢の指で、窓の外を指さした。そこにあったのは、近くの山だった。

この辺は、自然が多い場所だと、部活の前にたくさん聞かされた覚えがあった。それは、五人ともそうだった。

「あそこが…？」

黒豹が、狼に聞いた。

それに続くように、鷲が言った。

「なんなの？」

聞いた狼は、「えー」と声を張り上げると、その二人（二匹）に視線を向ける。そして、どこかいたずら気に微笑む。

こう、黒い狼は言う。

「分かっているくせにー」

聞いた蝙蝠は、少しばかり目を細める。「ケツ、」と小さく、口の中で言う。

「くツだらねー。じらさずに言えばいいだろ」

それを聞いた蜥蜴は、少しばかりその蝙蝠に視線を細める。「おい、それは…」と言いかけたところだった。

「いいのいいの、」

狼が、蜥蜴に言った。

聞いた蜥蜴は、一瞬反論しようか考えた。しかし、今の論点が

そこではないことを、すぐに自分へ納得させる。

「…、」

どこか不本意そうに、蜥蜴は口を閉ざした。

真つ黒な狼は、どこか嬉しそうな顔を浮かべた。「そうそう、と頭を小さく上下させる。」

「それで…?」

黒豹が狼に言った。

聞くと、狼は「あ、うん」と本題に戻す。

「ほら、もうよく直してる、あれだよ。あれ、」

次元の歪み。

どこか、凍てついた空気が吹き去った。

その四人（四匹）は、その言葉を聞いた瞬間に固まった。この言葉に聞きなれてはいるものの、やっぱりどこかでは、まだ慣れていないものがある。

唯一慣れていると言えるのは、この狼くらいだろうか。その四人（四匹）は、心の中でそう思った。

「…、やっぱりか」

小さく、蜥蜴はつぶやいた。

「なんとなく、分かってたぜ」

蝙蝠も、視線を細めて言い放つ。

「…やっぱりそう来るか…」

黒豹が、小さくしみじみ言った。

「それじゃあ…、みなさんがおかしい理由も…?」

鷹が、狼にそう小さく尋ねた。それを聞いた狼は、鷹の方に一瞥をくれる。「うん」と元気よく言い放つ。

「多分、これまでにないくらい大変なものだと思う」

そう、真つ黒な狼は言った。大きな感情が込められていないことに、四人（四匹）はすぐに気が付く。しかし、このことの重大さを一番理解しているのも、もしかしたら、この真つ黒なオオカミなのかもしれない。

そう小さく、四人（四匹）は考えた。

「気付いてないとは思わないけど、」

その狼が、四人（四匹）に言った。

聞いた四人は、狼の方に視線を向ける。狼は少しばかり、楽しそうに話した。

「この以上に、気付いているよね？」

その答えが、これだった。

「ツタリ前だ」

「ええ、気付いてます」

「…、勿論」

「ああ、身に染みてるほどに」

それを聞いた狼は、どこかほっとした様子で、「よかったー」と呟いた。

そして、続けてこう質問した。

「それじゃあ、この異変の中で、俺たち以外に変わっていない人物は？」

その狼の質問の意味が、全く分からなかった。

四人は聞くと、一瞬どういえばいいのか分からなくなる。全く分からない。と言うか、そんなやつがいるとは思っていない。

「ツてかよ、」

蝙蝠が、狼に言った。

聞いた狼は、蝙蝠の方に視線を向ける。蝙蝠は、どこか苛立った様子で、狼にこう強く言った。

「そんな奴、この状況でいんのか？そもそも、ただの人間がこの歪みに巻き込まれないとでも？そう考える方がどうかしてる」

それを聞いた蜥蜴も、小さく頷いた。

「確かに、いるとは思えない。でも、」

その蜥蜴は、言葉を切った。

四人の視線を、蜥蜴は受けた。蜥蜴は、自分の考えをの述べるだけだった。

蜥蜴は、狼の方に視線を向けた。

「質問するってことは、それなりに理由があるんだろ…？」

蜥蜴は言った。

狼は、少しばかり微笑んでいた。

「もっちろーん」

どこか楽しそうに、そう呟いた。

そして、狼は四人（四匹）に話した。

「実はね、これから重要と言われてる子がね、この部活にいるらしいんだよ。俺もただの受け売りなんだけど、でもその子が、それに気づいてるらしいよ？」

聞いた蝙蝠は、少しばかり視線を細めた。

「ッ、だったら早く教えてくれよ。その重要っていう奴をよ」

聞いた三人（三匹）も、同感だった。

この歪みに気付ける人物。そんなの、普通の人間ではまず無理だ。それを三人（三匹）は、よく知っていた。だからこそ、そう言えるのだ。

それを聞いた狼は、ただ答えるだけだった。

淡々と、その名前が告げられた。

「……………」

黒豹が、少しばかり目を丸くした。

何で…、何でその子が？

そう思ったからだ。

狼はそう告げると、他の四人（四匹）たちがあたふたし始める。

「まさか、そいつが…？」とか、「ツケ、くッだらねーよ」とか、

「うそ…」とか「あの子が？」とか。

反応はそれぞれでも、やっぱり、と狼には思うことがあった。

それ以外に思うことがあまりないともいえる。

「そいつが、この異変を気にし始めてるのか？」

それは、蜥蜴から発せられたものだった。

それを聞いた狼は、一度確実に頷いた。「うん」と、はつきり

と。

「それじゃあ、いつそのことその子を僕たちの仲間に取り入れちゃうとかは？」

鷹が、そう狼に提案した。それを聞いた狼は、「ちょっと難しいかなー」言って、顎の下のあたりを、小さくポリポリと掻いた。

「そんで、どうするつもりなんだよ」

蝙蝠が、狼に視線を向けた。

狼は聞くと、「勿論、」としか答えなかった。それは、その中の四人（四匹）が想像したことと、全く同じ答えだった。

「解決するしかないでしょー」

一言一句違わず。

それを聞いた蜥蜴は、小さく吐息を吐いた。

「まあ、俺たちしか解決できない問題だからな」

そして、続けて鷹が言った。

「そうだよ、これに分かるのは、僕たちくらいだからね」

そして、それに乗るように、蝙蝠も言った。

「チツ…、面倒くさいな、ツタクよ」

しかし、それはそれなりの、やる気の表れだということを、狼は知っていた。

狼は、最後に黒豹の方に視線を向けた。黒豹は、どこまでも考えているような、そんな表情しかしていなかった。どこまでも、自分の考えをつなぎとめようとしても、どこかでほどけていくような、そんな感覚に近かったかもしれない。

しかし、この場合、考えるよりも実行しなければならない。それだけは、はつきりとしていた。

「…、仕方がない」

黒豹は、乗り気なようで乗り気ではない声を上げた。

それを聞いた真つ黒な狼は、少しばかり微笑んだ。それ以外にすることがなかったともいえるかもしれない。

それに、それ以外に何かをしても、どうせこの場では意味がな

い。

それを、十分承知しているからかもしれない。

「それじゃあ、異論はないってことで、いいかな？」

その真つ黒な狼は、確認するように言った。

そもそも異論する奴だったら、そもそもとつくにこの団体から離れて行っている。全員はよく理解している。

誰も、何も言わなかった。つまりは、そう言うことだった。

「それじゃあ、準備はいいー？」

狼は、どこかおどけた風に、その四人（四匹）に聞いた。それを聞いた全員は、狼の笑いが映ったのか、どこか嬉しそうな、それでいて力強い笑みを浮かべた。

黒豹は、やはりどこか、納得がいかないような、そんな表情でうつむいていた。

狼は、それを無視した。

「それじゃあ、早速行きますかー！」

狼が、声を張り上げた。

その次の瞬間だった。

食堂に、狼と黒豹と蝙蝠と蜥蜴と鷹の慟哭が、響き渡った。それは、山の向こうへと、皿に響き渡って行った。かもしれない。

食堂には、もうすでに誰も、何もいなかった。

その空間には、ただ流れている時間だけが、押し寄せてきているだけだ。

かしゃり、かしゃり。

音が聞こえてきた。それは東海林の耳に、よく分からない音としてとらえられた。それが意味している物も、はっきり言って東海林には、全く分からなかった。

その音は、何かを研ぐような、しかしどこか、音質が違うよう

な。そんな、妙な音だった。東海林は、バーストンの音が聞こえなくなった代わりに、まぶたの裏を見つめながら、ずっとその変な音を聞いていた。

何だ？

東海林は思った。思うだけで、動こうとはしなかった。そもそも、こんなところで動いても無意味だ。それが東海林には、よく分かっていたからだ。それに今は夜だ。こんな時間に外に出たら、流石にみんなにも迷惑がかかるだろう。いくらこの合宿がおかしくなったとはいえ、マナーはマナーだ。東海林の中で変えることは難しい。

かしやり、かしやり、…しるりん…。

本当に、妙な音としか言えなかった。この音を聞いたら、絶対に頭に引っかかる音になる。絶対に。

東海林は思ったが、それでも目を少し開ける程度だった。目を少し開けても、そこにはやっぱり真っ暗な世界が広がっているだけで、あまりぱつとしない、一見旅館の様なホテルの一室を見回す。しかも東海林の布団の下は、木の板で補強されている。

何も、おかしいところはなかった。東海林はあたりを、小さく見回した。

ただでさえ妙な合宿で、東海林の中ではそれらを整理する時間が必要だった。それが今、目をつぶっていた時間だった。しかし、その音が気になって仕方がなかった。

東海林は、辺りを自分の目に移していく。

部屋の隅には、みんなの荷物がぐっちやぐちやになって置いてある。そこから少し目を離すとテレビがあり、その近くで雄大が眠り、布団が敷いていないところで、青龍が謎の亀の甲羅を背負いながら寝息を立てる。一瞬、こいつらいつ帰ってきたんだ？と東海林は思うが、あえて考えないことにする。どうせ考えたところで無駄だ。そう思ったからだ。

そこから目を離すと、小さな扉をかいている大介と、青龍の近

くでとぐるを巻いている緑龍がいる。東海林の目には、はつきり言
つて二人とも、同じようにしか見えない。東海林は思う。

そして、押し入れの中から漏れてくる光の奥で、何か奇妙な声
が聞こえてくる。押し入れから出ているのは、一本の黒いコード。
何なんだろうか、と東海林は思う。

気にしないことにする。と言うか、気にしたら負けだ。本気で。
東海林は思い、更に視界を移していく。そして、自分の横のあ
たりで、はっとなる。

あれ…？

東海林は心の中で小さく思った。それは、東海林の中でなくて
はならないものだった。そのはずなのに、東海林の横にはそれがなか
った。

赤龍が、そこにはいなかった。

さつきまで、東海林の隣でとぐるを巻いていたはずの赤龍が、
今は東海林の視界から、忽然と姿を消しているのだ。そこに赤龍の
姿はなく、代わりに、何も無い空間が広がり、その奥には、ドアが
ある。この部屋と、豪華な廊下をつなぐ唯一のドア。

しゅりん…、

その音が、東海林の耳を突いた。

この音が一体何なのか、東海林には分からなかった。考えるだ
け無駄だと、東海林は確信した。

もういいや、寝よう。このまま考えてても、ストレスたまるだ
けだ。

東海林は心の中で思った。そして、東海林は小さく息をついた。
赤龍がないから、寝言のため息のことを言い咎められることもな
い。つまりは、そう言うことだ。

東海林は目を閉じて、再び自分のまぶたの裏を見つめ始めた。
そこには音も何もない、ただ真つ暗な空間が広がっているはずだっ
た。

そのはずだった。

「東海林、」
その時だった。

東海林は思わずはっとなった。そして東海林は、思わず目を開けた。そこにある、若干の光が飛び込んでくる。

いたのは、赤龍だった。

赤龍は東海林の隣で呆然と立ち、東海林の方に視線を向けている。東海林は見ると、少しばかり息を詰める。

「…、なんだ、赤龍か」

東海林は布団から起き上がる。そして、赤龍の方に視線を向ける。

赤龍と目があつた、その瞬間だった。

赤龍の目が、赤いことに気が付いた。

目が…、赤い？

考える。しかし、東海林の経験上、目が充血しているわけでもないのに、こんなに赤くなっているように見えるのは初めてだった。しかも、ほのかな光でその眼は東海林に光を放っている。

炯々と、怪しく。

「東海林、気付いておるのじゃな…」

赤龍は、小さく東海林に言った。

そんなことを言われても、はつきり言って東海林には、何のこただかさっぱりわからなかった。と言うか、何だ？何で赤龍の目が、赤く光ってるんだ？

東海林は、その威圧的な視線から、少しばかり目をそらす。そして、赤龍に言った。

「…、気付いてるって、何だよ。それより、お前どこに行つてたんだ？」

聞いても聞いていなくても、赤龍の答えは一緒だったのかもしれない。

「東海林、お前は」

気づいてるな。

その声は、赤龍の物ではなかった。

いつもの口調が吹っ飛んで、まるで何かを威嚇するような、そんな声が東海林の耳に届いていた。

一瞬、東海林の背筋に、冷たい感覚が走った。

悪寒だった。

「…お前、赤龍…、だよな…」

東海林は言いながら、赤龍の方に視線を向ける。赤龍の目は、見なくなかった。見ているだけで、東海林の中の何かが、どんとんと狩られていくような、そんな、よく分からない感覚。嫌な感覚。非常に、冷たい、感覚。

「…、質問に答えよ」

赤龍は、東海林に言い放った。

東海林は、動けなくなった。手足が、うまく言うことを聞かなくなかった。

「…東海林、お前は、この合宿がおかしくなっていることに、気付いているな…？」

聞いた東海林は、困睡を飲んだ。それしか、出来ることがなかった。

どうする、どうするべきだ？俺は。

東海林は、頭の中で必死にシミュレートする。どう答えたら、どうなるのか。しかし、それは無駄だった。

何をしてどうなるのか。

東海林には全く分からなかった。

「…、どうなんだ…？」

赤龍は聞いた。

東海林は、頭の中だけで、物をいろいろと考えさせた。

狼と黒豹と蜥蜴は走り、蝙蝠と鷹は飛ぶ。夜の空と地に、五つの影が走っていた。それは、さっき話していた五人（五匹）だった。それらは、ものすごい勢いで走っていた。目にも止まらない、

そんな風のような速さ。

しかし、狼たちにとつてはそれが普通で、それが出来ないことなんて、まずあり得なかった。そんなことは、ありえないのだ。

目指しているのは、山の方だった。山には、やはり歪みがある。それを、その五人（五匹）は認識していた。だからこそ、そこに行かなくてはならアないのだ。そこに、歪みがあるから、だろうか。まるでエベレストだ。

狼は思った。走りながら、考えた。

そこに歪みがあるから、俺たちは走る。それじゃあ、俺たちは何のために、そこに走る？俺たちのため？

考えてみる。

はつきり言って、歪みの方に走ることが狼にとつて、いい行動だとは思えない。それで得があるとは、はつきり言って思えなかったのだ。

狼はただ、走り続けるだけだった。その歪みの方に行けば、この合宿の壊れかけた原因が分かる。そう確信していた。逆にそうでないで困る、と言ったところだろうか。

狼は思うと、上の方を見る。蝙蝠と鷹も、順調に進めているようだった。

それを見た狼は、少しばかり微笑んだ。そして、小さく一息をついた。その時だった。

その五人（五匹）は、山にいた。いつの間にかいたわけではない。ちゃんと走ったり飛んだりして、山に目的地を定めたのだ。

そこに満たされているのは、静寂と、歪んだ感覚。

つまりは、そういうことだということ。

「着いたみたい」

狼は、どこか楽しそうにそう言った。

それを聞いた蝙蝠は、自分の目の前を見て、少しばかり視線を細める。

「そして、いきなり歪み発見、みたいだぜ」

その蝙蝠は吐き捨てた。「ケツ、」と、どこかつまらなくて面倒くさそうに。

聞いた蜥蜴は、目の前にあるものを見てみる。

そこにあつたものは、黒だつた。どこまでも、穴のように歪んでいる、丸い黒。何処から見ても黒で、どこから見ても丸い。しかし、球体と言つわけではない。そもそも、そんなものが空中にあるわけがない。

狼はそれを見て、「はっけーん」と楽しそうに言った。慣れているからだろうか。黒表示は考える。しかし、それはないと思う。このテンションの高さは、この狼は生まれつきだ。それをしっかりと、その黒豹は知っていた。

鷲が、小さく言った。

「今回ののは、少し、おおきいですね」

聞いた蜥蜴は、それに肯う。

「ああ、いつもはこれの一回りくらい、小さいからな」
聞いた狼は、どこか納得のいかないような視線を、その少し大きめの黒に向ける。それは周りの空間を歪め、周りの時間をゆがめ、そして、周りの世界そのものを歪ませる。

つまり、この世界と言つ主観からは危険な存在。

狼ははつきりと、それを理解していた。だからこそ、腑に落ちなかった。

何でこんな大きな歪みが、こんなところに、あるのか。しかもこの時期に、このタイムミングで。

考えると、少しばかり嫌になってくる。何なんだろう、と狼は考える。こんなに大きい歪みが、ピンポイントであるホテルの近くで、しかも合宿中、そんな事、ありえるのだろうか。

偶然にしては、出来すぎている。狼は考えた。

「見つけたことだしよ」

蝙蝠は、どこかせっかちそうに言った。そしてその歪みに近づいていく。

「そろそろ、潰そうぜ」

言うと、蝙蝠はその歪みに手を近づけて、小さな虫を潰すかのようなしぐさで、その黒を潰そうとする。

いつもの歪みの消し方は、強引に周りの空間を引き延ばして、その黒を空間で埋めてしまうという方法。つまり、穴を潰してしまふという方法だ。これも、それを使えば確かに、その黒を潰してしまふこともできる。潰す、と言うよりは、そこに空間があったことにする事が出来る、と言えはいいだろうか。

蝙蝠は、その黒に触れようとする。

まあ、大丈夫だろう、と狼は思う。つまりは、そう言うことだ。ただ、いつも通りその歪みを潰すだけだ。

そのはずだった。

バチンッ！

大きな音が、その穴からした。そして、妙なことが起こったのだ。

その穴が、急に黒から白へと変色した。あらゆる光を飲み込んでいたものが、今度はあらゆる光を、一気に放出し始めたのだ。

蜥蜴は驚き、一瞬後退した。手のひらを見ると、何かやけどをしたかのような、そんな、皮膚が焦げたような跡が、そこに残っていた。

「な…何だ?!」

蝙蝠が言いながら、その白に目をやった。

「な…」

黒豹が、小さく呟いた。そして、「何が起こってるんだ…!」とか、「え!こんな事って起こるの…?!」とか。

…危ないかもしれない。本能的な何か、狼の中でそう告げていた。狼がそれを、理解できないはずがなかった。

「みんな!離れて!」

その狼は叫んだ。あたりに音を、響かせた。遅かった。

その白い穴から、それがいきなり姿を現した。それは、石でできているようにも見えれば、泥でできているようにも見える、そんな代物だった。夜だから見分けがつかないわけではない。そもそも、夜目が効かない狼なんて、その狼は聞いたことがなかった。

みんなは一瞬で、その穴の近くから離れる。そもそも、本能的に離れたものだろう。しかし、それでも反応が、一泊ほど遅かった。ゴーレム、と言う物が、話の中でよく出てくることを、狼は知っていた。そうだ、そう言えばゴーレムは、こういう土だか粘土だかできていたはずだ。それを、その狼は思い出した。つまりは、そう言うことだ。

ゴーレムだった。

「あれは…？」

蜥蜴が、それを見ながらつぶやいた。

「…！」

黒豹は、そのゴーレムの方に視線を向けて、少しばかり目を細めていた。

「ッ、まためんどくさそうなのが出て来やがったな…ッ！」

蝙蝠が、吐き捨てるように言った。

「…なに…これ…！」

鷹は、取り乱しているようにも見えた。

みんな、そんな反応をするのも当たり前だ。その狼は思った。

かくいう狼も、そのゴーレムを見たことはない。これが一体何なのか、狼にも、はっきりとしたことは分からない。しかし、名前は決められる。

「…ゴーレム…、か…」

狼の表情から、笑うような感覚が消えた。

一体何なのか、全く分からない。結論に至った。つまり、東海

林では分からない、と言うことだ。しかし、ゲームと同じだ。東海林は思った。ゲームのプログラミングを把握してしまったら、そのゲームのほぼすべてを理解したといっても過言ではない。つまり、どこをどう進めばいいか、なんてものは完璧に分かってしまう、と言うことだ。

それじゃあこの場合はどうなるんだ？

東海林は頭の中でだけ考えた。そもそも、こんなことが現実でありえていいはずがない。赤龍が、東海林に睨みを利かせるなんてことは。

つまり、結論を言うと、すべてがおかしい。

何もかも、おかしいということだ。

まるで、あの時大介がやったような、ゲームの上書き（override）だ。東海林は理解した。しかし、と東海林は思う。

もしそうなんだとしたら、みんなはいつたいどうなった？東海林は考える。そもそも、何で合宿が上書きなんてされてるんだ？

考えても、分かることなんて出てこない。出てくるのは、よく分からない霧のようなものだけだ。つまりは、そう言うことだ。東海林は思った。

目の前の赤龍も、何かに上書きされている？

考えただけでもぞつとする。

しかし、と東海林は考える。もしそうなのだとしたら、一体誰がそんなことをした？一体誰が、そんなたいそれたことをしたんだ？もし合宿の上書きが目的だったのだとしたら、

何で俺は、上書きされなかつたんだ？

どんなフラグが立つか、そもそもフラグなんて立つのか。その前に、赤龍がどうしてそんなことを聞くのか。

赤龍は、この変化に気付いている？

頭の中でだけ、東海林はいろいろと考える。そして、妙だと東海林は思う。

赤龍は東海林が眠っている間に上書きされた（？）　上書きさ

れたみんなは、全く自分たちが変なことをしていると実感していない 赤龍もその一人 のはず。

なのに、赤龍は今、東海林に聞いたただしている(？)。
どういうことだ？

考えて分かるようなものでは、決していないことに、東海林は気が付いた。そもそも、そんなものが分かるのは、まさに神のみ、と言うべきだろうか。東海林は考えた。

神、か。

東海林は思う。

確かに、神っていう存在が、本当にいるのだとしたら、それは確かにできるかもしれない。東海林は考える。でも、腑に落ちない点がある。

何で、赤龍は俺に、気付いているかなんて聞くんだ？何で、神は俺の上書きをしなかった？何で、赤龍はみんなが上書きされたことに気付いているんだ？

汗が酷い。

喉も乾く。

しかし東海林は、手を握るだけだった。手の中に溜まっていく汗が、東海林の中で本物だと、認識されていく。

つまり、これは現実で、決して東海林の夢の中ではない、と言うことだ。

と言うことは、と考える。

神「この合宿を捻じ曲げた奴。だとすると、この合宿と一緒に捻じ曲がった奴には、それがねじ曲がっている様には見えない。一緒に捻じ曲がって捻じ曲がっているから、相手を見ても、全くそれに気づかない。

しかし、赤龍はそれに、まるで気づいているようだ。しかし赤龍も、どこか捻じ曲がっている。

つまり、どういうことか。

そう言うことだ。

東海林は、小さく赤龍に口にした。
「…、お前が、」

合宿を、おかしくしたのか？

聞いた赤龍は、赤く炯々と光らせた目を、東海林の方に向ける。

「…、」

何も答えない。

つまり、そう言うことだということ。

「それに、お前、本物の赤龍じゃないな」

東海林は、冷静そうに赤龍に言った。それが赤龍なのか、それは置いといて、東海林は赤龍に、そう言うだけだった。

赤龍は、上書きされた？

考えても、その答えが東海林の中にあるわけがなかった。つまりは、ただ知らないだけだった。

「…お前には、まだ関係ない」

赤龍は言った。

声も口調も、赤龍には出来ないものだ。つまり、これは赤龍じゃない何かだ。そう認識するしかなかった。

「ある」

東海林は、少しばかり冷静さを乱す。

「俺は赤龍の友人だ。親友だ。それに、赤龍は俺の居候だ。それなのに、関係がないなんて言いきれない」

聞いた赤龍は、目を顰めた。

「お前は、」

誰だ？

東海林は、赤龍に問いただした。しかし、今の赤い龍は、赤龍ではなかった。

「…知ってどうする」

赤龍は、東海林に耽々と告げるだけだった。

言葉を間違えたら、絶対に喰われる。東海林は赤龍の赤い目を見ながら、思わず恐怖してしまった。

シツモンをマチガえたら、クツてやる…。おマエのタマシイまでクダいてクツてヤル…。

東海林に、そう言っているような、そんな視線だった。

ゴーレムのすべてが、その白い穴の中から出て来た。それは、あんな小さな穴からではとても出てこれそうにないほどの大きさをしている、狼の二倍ほどはあった。やはり、泥の塊のようにも見え、土くれの寄せ集めのようにも、石を不恰好に砕いて並べただけのようにも見える。

狼たちを見たゴーレムは、咆哮した。

ggグuuuuuuwwwwおおオooooオooooおおオオ
GGGGアアア！

意味のない、ただの音。

「ここからは任意で攻撃！」

狼は言い放つと、すぐに自分の立っている位置から、狼の横に移った。みんなも、後ろへ回ったり、横へ行ったり、空へ飛ぶ。そして視線の先にあるのは、不恰好で醜い狼だった。

空から、声が聞こえた。

「喰ツらえエー!!」

蝙蝠が言うと、空中から地面へと、加速をつけて、拳を前に突き出した。それは、動きが鈍いゴーレムにあたる。ゴーレムの胸部を削り、蝙蝠はすぐに、ゴーレムの後ろの位置で着地する。そして蝙蝠は、ゴーレムを確認する。

決まったか？

思ったその瞬間だった。

ゴーレムの太い腕が、蝙蝠の胸部に食い込んだ。

「グお…ッ！」

小さく、蝙蝠は苦悶する。腹の感覚が、一瞬皆無になる。しか

し徐々に、そこから伝わってきた感覚は、痛みにはならない。

蝙蝠は地面に叩きつけられる。蝙蝠は、動けないほどにまで、感覚が瞬間的に鈍化していく。鈍くなった感覚の中、蝙蝠はゴーレムの削れたはずの場所を見る。

土くれ。

そこに、削れた跡なんてものはなかった。そこにあるのは、ただの土の塊だった。そう言うことだった。

自己修復。

暗転。

「おい！」

蜥蜴が小さく呟いた。その時だった。

蜥蜴の方向に、ゴーレムの拳が向かう。見た蜥蜴は、瞬間的にその拳をよける。ゴーレムの方に視線を向ける。ゴーレムの目に、感情なんてものはない。

瞬間、

その腕が、蜥蜴の方に向かって振り払われた。

蜥蜴の背中に、ものすごい衝撃を覚える。五感が一瞬なくなり、目の前がぼやけていく。平衡感覚なんてものが、なくなっていく。

「あ…ッ」

そう呟けたが、蜥蜴はすぐに地面に倒れる。

狼の方に、ゴーレムの左肩が目に映った。それが、狼の目をくぎ付けにした。

そこには、文字が刻まれていた。

『EMETH』

エメス？

狼の頭の中に、その単語が駆け巡った。どこかで見たことがあるような、そんな単語だった。

「危ない！」

その瞬間だった。

狼の背を、黒豹が押した。

さっきまで狼がいた位置に、ゴーレムの拳が炸裂した。つまり、
そう言うことだった、と言うことだ。

「…！」

そこにいるのは、足が速いことが自慢のはずの、地面に倒れた
黒豹だった。

エメス E M E T H …、

真理？

狼の頭の中で、一つの単語が浮かんできた。

ゴーレムの視線が、狼の方に向いた。それに気づいた狼は、ゴ
ーレムの方に目を細める。そして、

少しばかりの笑み。

なるほど、そう言うことが。

狼は、納得した。

そして、ゴーレムの腕が、狼の方に払われる。狼はそれを見る
と、その払われた腕から退く。そして、飛んでいる鷹に、こう言っ
た。

「ねえ、聞いてる?!」

それは、鷹に放たれる。聞いた鷹は、一瞬その声を聞いて取り
乱す。

「え…、あ、な、何?!」

鷹の姿に似合わない、おどおどとした声だった。

それを聞いた狼は、ゴーレムの方から目を離さない。ゴーレム
の払われた反対側の腕を飛び越え、走り出す。

「肩に、アルファベットみたいなのが書いてあるから、最初の文
字を…」

ゴーレムの突進。

見た狼は、「ううお！」と言いながら、ゴーレムから走る。狼
は、なるべく鷹の位置からその文字が見やすいように、工夫して楕
円に走る。

「最初の文字を、」

削って！！

流石に、追われると笑う余裕がなくなる。

それを聞いた鷹は、一瞬何をすればいいのか、よく分からなくなる。しかし、狼が言ったことは覚えている。

肩 文字 アルファベット 最初の文字 削る？

ゴーレムの肩に刻まれているアルファベットの最初の文字を削れ。

つまり、そう言うことだ。

鷹は理解した。

「ッ！」

そして、夜目が効かない鷹は、少しばかり目を細める。もしかしたら、ビタミンBが足りていないかもしれないかもしれない。そう少し考えつつ、ゴーレムの肩に目を向ける。狼が楕円に走っているためか、ゴーレムの肩が、よく見える。

狼に、ゴーレムの拳が炸裂する。狼は器用にそれをよけていく。……！

見えた。その文字は、

『EMETH』だった。

東海林は固唾を飲んだ。二つの目が、東海林の方に赤く刺さる。そして、東海林の方へと、耳を傾けている。

東海林は、少しばかり考える。

はつきり言って、そんなことはどうでもよかった。いまのこいつがだれかなんて、東海林はどうでもよかった。どうでもよくて、東海林が思っていることはそうではなくて、どこまでも赤龍のことだった。それが結果的に、こいつのことにつながっているに過ぎない。それは、東海林の中でも容易に出る答えだった。東海林は、赤龍のことが気になっていただけだ。今の赤龍は、元に戻るのか？俺

はあいつに会いたいんだ。思うが、東海林に確信が持てなかった。はつきりと、そいつに聞ける内容でもあった。東海林は確かに、今なら聞く事が出来ると思っっている。そいつも、丁度東海林の方に耳を傾けているし。

そうじゃない。

東海林は考える。そうじゃないんだ。つまり、俺が恐れてることってというのは、こいつが俺をどう殺すかじゃなくて、こいつの中に赤龍がいるのかどうか、それとも、上書き(override)されたのかどうかってことだ。東海林は、その赤い目を見つめる、はつきりと、面白いほど、それが嫌なほど分かる。そこに赤龍の意識なんてかけらもない。そのかけらがあるのなら、心から東海林にこんなことは聞かないはずだ。結果論は嫌いだ、総合的に見ても東海林の頭の中では、これが正論とされるものだった。それは、もしかしたら、真実かもしれない、と言うことが東海林は嫌だった。

「…、はつきり言って、俺はお前のことはどうでもいい」

東海林ははつきり言った。

赤い目が、東海林の方へ細められた。

「俺ははつきり言って、この合宿を捻じ曲げたお前じゃなくて、赤龍の方が心配なんだ。赤龍が今どうなってるか、それを知りたいんだ」

本当に、

本当に、そうだろうか。

東海林は考えた。本当に俺は、赤龍の存在を確かめたいのか？ そりゃ確かめたいさ。赤龍がどうなってるか。でも、怖いんだろ？

東海林は、口を紡いだ。

赤い目の奥に、赤龍がいるのかいないのか。

その赤龍がいたとして、こいつの中から出てくる事が出来るのか。

それは、東海林には分からないことだった。

双眸が、東海林の方に細められる。そいつの口元が、不気味な

笑みを形作る。

「ほう、面白いやつだな」

そいつは言った。声も、口調も、赤龍ではなかった。姿が、あまりにも似すぎていて、東海林は嫌だった。

「それじゃあ、私のことは、別に知らなくてもどうでもよいのだな」

聞いた東海林は、はつとなった。確かに、別にどうでもいい。はつきり言っつて、東海林はこの合宿と赤龍を、元に戻してほしいだけだ。それ以外は、全くと言っつていいほどどうでもいい。

しかし、どうでもよくない。

「…、確かに、お前のことはどうでもいいと思っつてる。お前が何をしようつと、確かにお前の勝手だ。でも、」

東海林は言っつた。

そいつの目が、カツと細くなっつた。どこか、不愉快そうつで、それでいて、どこか嫌な顔をしてる。

「…でも、俺はお前に頼みたいんだ？」

訳が分からなくなっつたそいつは、東海林の方に目を緩めた。沈黙を保ち、東海林の方を觀察する。

そして、目が細くなっつる。

「…、何だ、東海林。言っつてみる」

穏やかそうな口調が、東海林の耳の中に飛び込んできた。しかし、その穏やかな口調の裏に、真つ黒に近い感覚が孕まれていることを、東海林は知っつている。

東海林は小さく、しかしはつきりと、そいつに言っつた。

「もしお前がこの合宿を捻じ曲げたんなら、頼む。この合宿を…、元に戻してくれ」

あたりまえな願いだっつた。

そんな願いは、あつて当たり前の物だっつた。東海林は、心の底からそいつに願っつた。この合宿が、元に戻つてほしい。強く。

そいつの目が、さらに赤くなった。

「……」

ニンゲンフゼイが……。

聞こえた言葉だった。片言ではない。しかし、心に直接語りかけてくるような、そんなような言葉だった。そもそもそれが、本当に言葉なのか、東海林にはよく分からなかった。

「おマエはワかるか？」

そいつは聞いた。

東海林は聞いた。

「なぜおマエが、コのガツシユクでヘイセイをタモてているのか。ワかつているのか？」

重い。

どこまでも、重々しい口調だった。東海林の中で、嫌なくらいその声が響き渡った。東海林の中で、咽かえるような気持ちわつるさが、一気に押し寄せてきた。東海林の中で、これ以上目を開けていられないほどの徒労感が、東海林を苛んだ。

「……」

東海林は、何も答えられない。何を答えても、答えにはならない。

東海林の中に答えはない。

「それは、おマエがミトめられたからだ。おマエが、ワレにミトめられたからなのだ！」

はつきり言つて、訳が分からない。

そもそも、東海林には認められた覚えがない。

その前に東海林は、咽かえる。

「……！」

グオホゴホ……

何なのか、全く分からない。しかし、気持ちが悪い。嫌なくらい気持ちが悪い。腹がむかむかするなんてもんじゃない。吐き気がするなんてもんじゃない。もっと、東海林の中の底の部分が、こい

つに拒絶を示しているような、そんな気がした。

何だ。

何なんだ！

東海林は口に手を当てて、未だに咽ている。

グオホグオホ…ッ

「……」

1 5 7 1 1 4 5 5 5 1 7 1 1 4 0 2 , 1 5 3 2 1 4 4 4 8 1 9

5 1 3 …。

聞こえた。

聞いた東海林は、その方向に視線を向ける。意味が分からなくなる。何だ、何なんだ。こいつは何を言ってるんだ。

「1 5 7 1 1 4 5 5 5 1 6 1」

7 4 3 2 5 2 4 3 7 3 9 3 8 2 …。

！

はつとなつた。

一瞬、周りの音が消し飛んだような、そんな錯覚にさえ見舞われた。しかし、その言葉は意味不明なものだった。

意味不明すぎて、理解が出来なかった。

「どう言うことだ…！」

そいつは叫んだ。

「ソのままのイミだ。おマエには、リカイデキただろう？」

出来るわけがないそんなもの。

そいつは思いながら、その二つの赤い目を見つめる。赤い目は、どこかでそいつを笑っているように見える。

意味が、分からない。

分かるわけがない。

グオホグオホグオホ…ッ！

さらに、ひどい咳をした。

「さっきのイミが、リカイデキたということは、そういうコトなのだ」

赤い目が、語った。

そいつは、薄れていく感覚で、ただ咳をし続けていた。だめだ、このままじゃ肺に傷が出来て、血を吹きそうだ…。

その暗い、滅茶苦茶な咳だった。

赤い目は、笑っていた。

そいつの意識が、どんどんと暗くなっていって行った。それは、よく覚えていた。

俺は…。

暗転。

狼は楯円に回っている。ゴーレムは、学習するようにできていないようで、狼が楯円に回っていると気付かずに、ただ後ろに付いて走っているように見えた。

鷹は、上から見ていて思った。そして、そのアルファベットを確認する。『EMETH』と書かれている。これは、イームスと読むのだろうか。

思いながら、さっきの言葉を整理する。

アルファベット、最初の文字、削る。

狼は、鷹の方を確認する。そして、自分の足が、段々と疲れてきていることを知る。だめだ、このままだと…。

「早く!!!」

狼は叫んだ。

聞いた鷹は、はっとする。そうだ、自分が何とかしないと。何とかしないと!

思いながら。ゴーレムの方に視線を向ける。ゴーレムは、アルファベットが書かれていたり書かれていなかったりする楯円を描きながら、狼に付いて回る。狼のペースが、少し筒ではあるが崩れてきている。

この場合、ペースを崩すということはどういうことか。

ゴーレムに、叩き潰されるといふことだ。

最悪、全滅かもしれない。

考えてしまうと、鷹はその思考を一掃した。そうだ、僕が頑張れば、全員助かるんだ！やらないと！

思いながら、鷹は目を見開く。ビタミンBが足りないからって何だっというんだ！夜目が効かないからなんだっというんだ！頑張らなかつたらそこでおしまいなんだ！

ゴーレムの肩を、目にとらえた。

殆ど、本能的だったと言っていい。鷹の動きは、人の目には絶対にとらえられない速さで、そのゴーレムの方に飛んで行った。

能ある鷹は爪を隠す。

その諺は、この鷹のためにあるものかもしれない。

鷹は、楕円の軌道を頭の中で考えながら、今狼がいる位置に、鋭い鉤爪を向ける。狼は走り、すぐにその鷹の狙っている位置から外れる。そしてただ走ると、その後ろには、泥の塊とも、石の寄せ集めともいえない物がある。

ゴーレム。

ゴーレムが、一瞬鷹の方に視線を向ける。しかし、ほんの一瞬。ほんの数度の傾きだった。

ゴーレムの肩と、鷹の鉤爪がこすれあう。そして、鷹の鉤爪は、確実にゴーレムの肩に書かれている文字を削り取る。

ガゴリッ！！

鷹の鉤爪から、嫌な音が聞こえてくる。鉤爪が半分くらいから折れる。そして、その代わりにゴーレムの一部が削れる。

始めの文字。

『 E M E T H 』 『 M E T H 』

E M E T H 真理。

M E T H 死。

狼は、すべてを読んでいた。

鷹は一度羽ばたき、空中からゴーレムを見る。狼は立ち止まり、ゴーレムの方に視線を向ける。

ゴーレムは止まっている。さっきまであんなに動いていた泥とも岩ともつかぬ物体が、急に動きを停止させた。

だけではなかった。

徐々に、ゴーレムの体の一部が、崩れていく。岩のようにボロボロとしていた物が、どんと、ドロドロとしたものになっていく。ゴーレムが、泥に戻っていく。

落ちたそれは、地面に落ちる前に風化し、風の一部になる。地面には、何も残さない。

ドロドロと落ち、崩れ落ちた。

「…、ふう…」

狼はそのゴーレムの方を見ながら言った。

鷹は地面から降りると、狼の方に足を向かせる。狼は、辺りを見回して、少しばかり頭でものを考える。

案外、大変だったな！。

ぶっ倒れながら唸っている蜥蜴と蝙蝠、そして、目を細めながら空の方に目を向けているのは黒豹。

結構なダメージだったかな。

狼は思った。

「あー…、痛え…」

蝙蝠が、吐き捨てるように言った。

聞いた蜥蜴は、近くで小さく答えた。

「同感…、だな」

どこか皮肉げな声だった。しかし、と狼は考える。そんな皮肉が言えるまでになったということは、それほどまでに回復したということだ。

「…、」

コクリ、と黒豹が肯いた。

まあ、大丈夫みたいだな。

狼は思いながら、小さく笑った。そして、ゴーレムが立っていた場所を見る。

そこには、跡形もなく何も残されてはいなかった。

一瞬、

全員が、立ちくらみに似た感覚を覚えたのは、気のせいだろうか。

一瞬

気持ちが悪くなった、その瞬間だった。

東海林は目を開けた。息が荒くなっていた。汗だくだった。しかも、思考が妙に、とち狂ったような勢いで巡っていた。

何がどうなったんだ…?!

思いながら、ゼーはーと息を吸う。だめだ、もう耐えられない…。そして東海林は、小さく咽る。ゲホゲホ…。

さつきよりもそんなにつらくはないむせかえりだった。

東海林は思いながら、目を天井の方に向ける。天井にあるのは、少しばかり洒落たランプだった。

…?

あれ？と東海林は思った。それ以外に、思うことがなかったともいえる。さつきまで、あの裸電球のぼろっつい廃屋みたいな場所にいたのに…。思いながら東海林は、布団から体を起こした。

布団ではなかった。

そこにあっただのは、豪華なベッドだった。そうだ、つまりそういうことだ。

ここはホテルの一室で、東海林が眠っていたのは、布団の上ではなくベッドの上だった。ここは、おかしなホテルではなくて、豪華なホテルだった、と言うことだ。

どういう…、ことだ？

東海林は思いながら、辺りを見回すことしかできなかった。一体何がどうなって、こんな間違っただけが起こってるんだ？そもそも俺は、さつきまであの畳が抜けた部屋にいたはずだぞ？こんなきれいな部屋にはいなかったけどな…。

そして、辺りを見回した。

あたりにあったのは、他のベッドだ。他のベッドの上には、雄大と大介と和山が、それぞれ規則正しい寝息を立てている。そしてそ

のそばに、青龍と緑龍が、綺麗なとぐろを巻いて眠っている。

青龍は、別に変な格好をしていないし、緑龍は、変な本を持っているわけでもない。雄大はよく分からないが、大介は別にカードらしいカードを持って眠っているわけではない。和山なんて、いたって健全な夜を過ごしている。

どういうことだ？

東海林は考えながら、一つ、みょうな鼾を耳に挟む。
？

それは、東海林のベッドのすぐ近くから聞こえてきている。東海林は思いながら、少しばかり目を細める。そして、東海林は自分のベッドの横を、恐る恐る覗く。

いたのは、少し崩れかけたとぐろを巻いた、赤龍だった。

いつも通りの寝相で、いつも通りの顔で、いつも通りの鼾だった。本当に、いつも通りだった。

さつきとは、比べ物にならない。

東海林は、色々と考えてみる。

もしかして、さつきの赤龍は全部夢だったのか？もしかして、さつきの雄大たちも、変な反応をしていた先生も、あのぼろっちい部屋も、全部、ただの夢だったのか？

あの台詞も、夢…？

思いながら、東海林は「あれ…？」と小さく呟いた。

「…、あの時、」

赤龍はなんて言ったんだっけ…？

東海林は、こんなことをずっと前に聞いたような覚えがあった。

夢は、起きてすぐに思い出そうとしないと忘れる。それでも、思い出せない部分がある。

赤龍の、あの台詞。

それは、東海林の中で、一つの方向の物を示唆していた。つまりは、ただこういうことだ。

東海林は思いながら、再び赤龍の方を見る。赤龍は、いつも通り

に眠っている。いつも通りに翼をたたんで、いつも通りに目をつぶっていた。本当に、いつも通りに。

目を赤くはしていない。

爪を東海林に向けてもいない。

東海林は考えながらも、自分で自分の頬を、強く抓ってみた。そして、頬から鈍い痛みを、東海林は少なからず感じる。確実な痛みが、東海林の頬を伝う。

痛みは、現実へと道を開く。

つまり、ここが東海林の目が覚めた場所、と言うことだ。思いながら、東海林は考えてみる。もしかしたら、全員がおかしな反応を取っていたのは、東海林の夢だったからかもしれない。だから、東海林はもしかしたら、一人だけその異変に気付けたのかもしれない。だからこそ、東海林は今、ここで目が覚めたのかもしれない。

考えて、東海林は思った。

バカみたいだな、俺…。

なんとなく落胆気味な雰囲気と、どことなく湧いてくる安堵が、かけ合わさったような感覚だった。

そっか、そっかそっか、そういうことなのか…。

思いながら、東海林は何となく自分が馬鹿みたいに思えてくる。どうしてあの時、これが夢だって気づけなかったんだろう。

はつきり言っつて、今となってはどうでもいい。東海林は思った。

今は、それが夢だと分かっただけでも、東海林には大きなものだった。

東海林は、試してみる。

「はあ…」

それは、東海林の無理矢理なため息だった。ため息と言うよりは、それは安堵のため息に近い物だった。

そして、赤龍の反応は、

「…、うーむ…、しょーじ…、ためいきは…、うーむ…」
寝言。

つまり、これがいつも通りのことだ。

東海林は思うと、なんとなくのしかかってくる疲労感が、東海林を苛んだ。まぶたが重かった。非常に、東海林は眠りたくなかった。さつきまで寝てなのにな…。

思いながら、東海林はベッドに横になった。そして目に映ったのは、洒落た形をした、ガラス製のランプだった。綺麗で軽い装飾を施された天井に、ほんのりとした緑の花柄の壁紙の部屋。

東海林は、いい夢が見れそうだった。

なんとなく確信できる。少なくとも、さつきよりは格段に言い夢が見られるだろうな。

東海林は思うと、小さく目を閉じた。まぶたの裏を、ただ覗いているような、そんな感覚だったような気もする。しかし、そこには光ではない闇ではなく、闇ではない光が、広がっていた。

東海林の息が、すぐに規則正しいものとなった。

小さなリス

起きた時、その時はもう、朝になっていた。

カーテンから差し込む太陽のほのかな光が、辺り一面に広がっていた。その光が、東海林にはなんとなく、救いと同じような、そんな感覚に思える。そして、辺りをもう一度確認してみる。

そこに広がっているのは、ホテルの一室だった。何処まで行っても綺麗な、洒落ているホテルの一室。決して、あの櫛屋そうあくではない。そこにあつたのは、なんとなく心が満たされるような、そんなほんのりとした暖色。

東海林は起き上がる。そしてベッドの上で、小さく伸びをした。東海林は、そう言えば、と思う。携帯電話、どこにやったつけ？

思いながら、東海林はベッドから降りる。そして、少しやわらかくて、つるつるとした感覚が、東海林の足の裏に伝わってきた。

ふぎゅ

音がした。

「痛い！」

それは、東海林の足元から聞こえてきた。その声に、東海林は聞き覚えがあつた。無いはずがなかった。

東海林のベッドの下で眠っているのは、赤龍に他ならない。

東海林はそれを見ると、自分の今踏んでいるものを、視線を下して確認してみる。そこにあるのは、赤くて細長い、先端が細くなつた、赤龍の尻尾。

それを見た東海林は、「あ……」と小さく赤龍に言う。赤龍は、東海林の方に細い目を向けている。

「ごめん、赤龍……」

東海林は小さく言った。

それを聞いた赤龍は、東海林に言った。

「謝る前に、赤龍の尻尾から足をどけてくれんかの……」

聞いた東海林は、「あ…」と小さく言った。そして、赤龍の尻尾から、足を退ける。赤龍はすぐに自分の尻尾をなでる。東海林は、絨毯の床に素足で立ち上がる。

赤龍は、自分の尻尾をなでながら、東海林の方に視線を向ける。東海林は、なんとなくよく分からないような、そんな視線であたりを見回している。

「全く、東海林は赤龍に迷惑しか掛けられんのか…？」

赤龍は、東海林の方に軽くぼやいた。

聞いた東海林は、「いや、ごめんって」と赤龍に謝る。

「それじゃあ、何がごめんなのか赤龍に説明してみよ」

赤龍は、急に東海林へ視線を細めた。

そんなこと、と東海林は思う。そして、すぐに赤龍に言った。

「お前の尻尾を踏んだこと、だろ…？」

東海林には確信があつた。これで赤龍は、少しご機嫌斜めなのだ。そう東海林は思う。と言うか、それ以外に要素がない。思った。

「それだけかの」

赤龍は、少し声のトーンを低くした。

一瞬、「へ…？」と東海林は思った。

それ以外に、赤龍に迷惑をかけたこと…？そんな事、あつたか？と言うか、逆なら山ほど思いつくんだけど…。

東海林は思いながら、赤龍の方に視線を送る。見た赤龍は、東海林の方に視線を細める。

「何じゃ、そのいかにも、それ以外にない、と言うような視線は」
それ以外にないような気がするの、東海林だけなのだろうか。
思いながら、東海林は少しばかり目を細める。そして、色々と頭の中で考える。

赤龍の尻尾を踏む 赤龍に迷惑。それ以外に赤龍への迷惑…。
「逆なら思いつくけどな」

東海林は赤龍に、そう言っただけだ。

聞いた赤龍は、小さな吐息を一つ吐く。そして、赤龍は東海林の方へと視線を向けると、こう言った。

「それでは、赤龍が今から言うことを復唱してみるがよい」

聞いた東海林は、「え…」と小さく呟いた。

聞いた赤龍は、「何じゃ、その嫌そうな返事は、」と東海林に聞いてみる。聞いた東海林は、なんとなく腑に落ちないような、そんな雰囲気です、赤龍に答えた。

「分かったよ…」

赤龍はそれを聞くと、東海林の口を見ながら言った。

「それでは言うぞ？」

東海林は、なんとなく面倒くさくなってきた。

赤龍は、どことなく笑いながら、東海林の方にこう言った。

「昨日急に…」

聞いた東海林は、赤龍の言葉を復唱する。

「き、きのうきゆうに」

赤龍は続ける。

「バスの中で、」

「ばすのなかで…」

「熱を出して…」

ちよつと待った。

東海林はそれを聞くと、目を細めた。ちよつと待て？俺が、熱を出した？そんな覚え全くないぞ。

思いながら、東海林は赤龍に口をはさんだ。

「赤龍、俺は熱なんて出してないぞ」

聞いた赤龍は、「何じゃ、もう忘れたのか…」と呆れながら、東海林の方に視線を向ける。しかし、どんなに言われても、東海林は自分が熱を出したなんて覚えは毛頭ない。皆無だ。そもそも、熱なんて出してない。

「東海林は昨日一日、風邪でうなされておったのじゃ。あ…、それじゃったら、知っているわけがないのかもしれない…」

はつとなつた。

風邪 寝込む 夢 悪夢 うなされる…。

そう言うことか、東海林は思った。

「昨日一日、か…？」

東海林は赤龍に言った。

聞いた赤龍は、「うむ」とはつきり東海林に言った。聞いた東海林は、少しばかり自分の考えに耽った。

確かに、昨日バスの中で眠ったことは覚えている。そして、確かその後、次に起きた瞬間に、合宿がおかしくなっていた。みんながおかしくなっていて、そして、何かがぶっ飛んでいた。そんなような感覚だった。

つまり、そう言うことなのかもしれない。東海林は思った。

そうか…。

「俺、寝てたのか…」

聞いた赤龍は、東海林の方に目を見開く。東海林はどこか、遠くを見つめているような、そんな表情で自分の足元を見つめていた。

どこか遠くに、東海林がいるような、そんな感覚がした。

見た赤龍は、東海林の思考を自分なりに読んでみる。

「もしや、東海林」

赤龍は、若干東海林の方へと笑む。にやにやしているような、そんな風にも見て取れる。

「な、何だよ…」

東海林は、そのにやにやに、少しばかり押される。

「変な夢でも見ておつたのではないのだろうか？」

ギク…。

東海林は思った。それがあまりにも凶星で、東海林は少しばかり困った。もしかして、これはまだ夢の中なのか？東海林は考えた。しかし、ここは確かに、あの洒落た部屋だ。それ以外の何かには見

えない。

東海林は思うと、赤龍の方に視線を向ける。赤龍は、にやにやと
している。

そして、赤龍は更に、その夢の内容を言う。

「どうせ東海林の事じゃ、 やら やらの い夢でも見て
いたのじゃ……」

東海林は赤龍を勢いよく蹴った。

「んなわけねーだろ！」

どこかむきになったような、そんな感覚だった。

赤龍は、ドアの方にぶち当たると、「う…、うーむ…」と言いな
がら床に倒れこむ。

「そ、そんなにむきに、ならなくとも…」

赤龍は言いながら、倒れて行った。

その時だった。

「…むにや…、うーん」

東海林の後ろから、声が聞こえてきた。その声は、どこか眠そう
で、それでいてどこか怠そうな、そんな声だった。

東海林は後ろを向いた。

ベッドの上で伸びをする雄大が、そこにはいた。「ふわあ…」と、
大きな口を開けてあくびをしている。

見た東海林は、その方向に視線を向ける。

雄大は目をこすり、東海林の方へと視界をぼやけさせる。そして、
あくびをしながら東海林に言った。

「あー、東海林が復活の魔法で生き返ったー」

つまり、そう言うことらしい。東海林はそれを見ていて思った。

東海林は、本当に風邪にかかっていたらしい。今の雄大の一言で、
東海林は納得した。やっぱり俺、風邪だったんだな。

雄大が起きると同時に、青龍も、いきなりぱちつと目を開ける。

雄大の声に反応したかのように、青龍は雄大の方に視線を向ける。

青龍は、東海林には無関心な様子だった。

「…、」

青龍は、どこまでも沈黙を保っていた。そこがまたいいところ、なのかもしれないが。

「おきたー」

雄大は言つと、ベッドの上で元気よく言った。

と思つたら、すぐにベッドの中へと入っていく。ちよつと待て、起きたんじゃないのか。東海林は思った。

それに連動するかのように、青龍も目を閉じる。そして、すぐにまた規則正しい息を立て始める。

「…何なんだか…」

東海林は言いながら、小さく呆れる。そして、時計の方に視線を向ける。時計は今、『5:45』を指している。デジタルとアナログがかけ合わされた、しかしどこか洒落たデザインの時計だ。シンブルだが、そこがまたいい。

東海林は、しおりの内容を思い出そうとする。しかし、東海林が最後に見たしおりは、たしか夢の中だ。そんなもの、あてにできるわけがない。東海林は考えつくつと、すぐにあたりを見回した。

テーブルがあった。その上に、しおりが散乱していた。

それを見た東海林は、表紙に『風戸 大介』と書かれたしおりをめくつてみる。先生らの言った重要事項が、細かく書かれたスケジュールがあった。そしてその中に、起床時間もあった。

起床時間は、『6:30』だ。六時半。つまり、今から四十五分後。あ、今ので四十四分になった。

思いながら、東海林は少しばかり考える。また寝ようかな…。

もしかしたら、眠つたらまたあのへんな夢を見るかもしれないけど、でも、大丈夫だよな…？きつと。

東海林は考えながら、「はあ…」と小さくため息を吐いた。あまりにそこがいつも通り過ぎて、あまりにもそこが、東海林にとつてに普通すぎて、東海林には、逆にそこが困りどころだった。

でも、まあいっか。

東海林は思った。この方が、東海林にはあっている。それを、東海林はひしひしと感じていた。

そして、一言。

「東海林…、ため息は…、するでない…」

ドアの近くで伸びかかっている赤龍が、東海林に向かって小さく言った。

聞いた東海林は、少しばかり笑いたくなくなった。小さく微笑み、東海林は赤龍に、小さく言った。

「ごめんな。」

心配かけて。

それを赤龍が聞いていたかどうかなんて、東海林には分からなかった。

東海林が起きたことに、みんな驚いていた。そう、みんなだ。先生たちや、憶羅先輩、秋沙汰先輩に、曾等先輩。そして大介や緑龍や香奈、黄龍もだ。黄龍がいたことは、東海林の夢の中だけではないらしい。東海林は思った。もしかしたら、夢かもしれないと思っただが、そこに黄龍がいると言うことは、真実に他ならなかった。

「おー、目を覚ましたー」

憶羅先輩が、練習中に東海林へ言った。それを聞いた東海林は、「そりゃ」と声を上げる。一瞬だけ、はっとなる。

もしあれがすべて夢なら、憶羅先輩も、俺がただの風邪だったって認識してるはずだ。

東海林は考えながらも、憶羅先輩の方に視線を向ける。そして、いきなり「はい」とか指される。

「シヨウジン君。『シンフォニエッタ』を全部一人でお願いしますー！」

聞いた東海林は、目を丸くした。一瞬、憶羅先輩の言っている意味が、全くと言っていいほどわからなかった。と言うか、どうしていきなりそんなことになってるんだ。

「あの、」

東海林は憶羅先輩に、少しばかり呆れ気味の視線を向ける。憶羅先輩は、何食わぬ顔で東海林の方へと視線を向ける。

東海林は、少しばかり困りながら言った。

「まだチューニングもしてないし、まだ基礎練も…」
言いかけた時だった。

その時、「それじゃあ」と憶羅先輩は声を張り上げた。聞いた東海林は、なんとなくそれが、いいものではないということは、確信していた。

赤龍が、憶羅先輩と東海林へと、視線を行ったり来たりさせる。

「シヨウジン君は『シンフォニエッタ』が基礎練替わりで、その間に、俺たちが普通に練習しておくね」

聞いた東海林は、思ったことをそのまま口にした。

「それってひどくないですか…?」

東海林はボソツと言った。

それを聞いた憶羅先輩は、「あーもうしょうがないなー」とか東海林に言っつて、チューナーを東海林へ向けた。一瞬、東海林はそのチューナーをじつと見つめる。そして、バスクラを口に啞えて、チューニングの音（B）を吹く。

憶羅のチューナーの真ん中で、液晶の針が止まった。つまり、ピッチは完璧だということだ。

「シヨウジン天才!」

言われて、東海林は困る。

何なんだろう、この無理矢理押し流そうとしている感は。

東海林は考えながら、バスクラの中にため息を押し込んだ。はあ…。と言う音の代わりに、ため息のようなバスクラの音が出てくる。ブフおおん…。

そして、

「東海林、ため息はするでないと、何度言ったらわかるんじゃない!」
と、赤龍に怒られてしまう。

聞いた東海林は、目を細めて、更に自分の中で生まれてくるため息を押しとどめて行く。息を吸い込む。

「これで、シヨウジン君『シンフォニエッタ』できるね！」

憶羅先輩が、東海林に言った。

聞いた東海林は、目を細めた。ため息の代わりだった。

「…、吹かなきゃいけないんですか…？」

東海林は、徐に憶羅先輩へと声をかけた。

それを聞いた憶羅先輩は、笑顔で東海林に言った。「勿論！」その台詞に、感嘆符がついていたことを、東海林が納得できるわけがなかった。

「だって、これはシヨウジン君の回復祝いだもん」

意味が分からない。

東海林は心の中で、憶羅先輩に思った。何なんだ、回復祝いってそもそも何で、俺の祝い事なはずなのに、俺が自分で演奏しなくちゃいけないんだ…。

なんとなく、考えているだけで悲しくなってくる。

その時だった。

「…、がんばれ」

隣にいる秋沙汰先輩が、東海林の肩を軽く叩き、そう東海林へと言った。つまり、やれ、と言うことだ。

全くもう…。

東海林は呆れつつも、仕方がなさそうに憶羅先輩に言った。

「…分かりましたよ…、もう…」

半分投げやりだった。

しかし、なんとなく東海林は納得していた。自分一人で『シンフォニエッタ』を吹いて、周りではただの基礎練習をする。

これは、いつも通りの事だ。憶羅先輩は、誰彼構わずにそう言ったことをみんなにする。たとえその対象が先生であったとしても、だ。

今回は、偶然東海林だったただけだ。つまりは、ただそう言うこと

だ。

普通の出来事なのだ。

思うと、東海林は少しだけ、楽しい気分になった。

次の瞬間、

「一、二、三、四ッ！」

東海林は、音符の嵐へと巻き込まれた。

廊下で、香奈に出会った。香奈は東海林を見ると、どこか安心した様子で東海林に言った。

「ああ、良かった…」

そして、目を閉じて吐息をつく。東海林はそれを見ると、香奈の方へと視線を向ける。香奈は、どこか朗らかで、どこか疲れているような、そんな視線を下に向けながら、少しばかり笑っていた。

「…、もしかして、心配かけさせちゃった、かな…」

東海林は弱々しく、香奈に言った。

それを聞いた香奈は、一瞬、体に電気が走ったような勢いで東海林の方へと反応する。

「い、いいいいいえ、そんなこと、全然…！」

どこか、ムキになっているところが、東海林にはほほえましかった。しかし、そこまでムキになっているということは、それだけ東海林のことを考えている、と言うことなのかもしれない。東海林は考えた。

「…ごめんね、」

東海林は小さく言った。

近くにいる黄龍は、一瞬驚いたような表情を、東海林の方へと向けた。赤龍も、東海林の方へと驚嘆しているような、そんな表情だった。

「え…」

香奈が一瞬、そう東海林へと呟いた。

東海林は、香奈にこう続けた。

「だって、俺…、色々と迷惑かけちゃったみたいだから…」

香奈は、一瞬東海林が何を言っているのかわからなかった。言っていることは分かるのに、それが理解できないような、そんな感覚に近い。

「そ、そんな…」

香奈は、少しだけ顔を赤らめた。

赤龍は、東海林の方へと視線を細める。そして、東海林は少しばかり視線を香奈からそらす。目を見てもらえない。

赤龍は、自分の肘で東海林に軽く当てた。「この、このこの」とか、小さく肘で言ってくる。

黄龍は、ただ笑っていた。ただ、東海林と香奈の方へ視線を見据えている様にも、見えなくはなかった。

そして、再び視線が重なる。あーあ、どうしよう…。

少しばかり、東海林は思った。そして、また視線を離れた。それは香奈も同じだった。

風邪ひとつで、こんなに迷惑をかけるだなんて。東海林は思った。しかし、それは仕方のないことだった。風邪にかかるからなら、はつきり言っただけの問題だ。東海林自身の問題も少しあるかもしれないが、殆どが何もない、と言える。つまりは、そう言うことだ。

これは、偶然だった。

気が、しないような、するような。

思い、東海林はため息に似た息を、辺りに付いた。それしか、出来ることがなかったともいえる。

「あ…」

小さく、香奈が言った。

東海林はそれを聞くと、一瞬香奈の方に視線を向けた。香奈は、自分の携帯電話を見ながら、東海林にこうつぶやいた。

「そろそろ、休憩時間終わるよ？」

聞いた東海林は、一瞬だけはっとなった。

もうそんな時間なのか…。

思うと、合奏の準備がなされた、食堂の半分に視線を向けた。もう既に、部員が集まりかかっている。

「…、そろそろ、行こうか」

東海林は言った。

聞いた香奈は、東海林の方に視線を向けた。「うん！」と、いつも通りの返事をした。

つまりは、いつも通りと言うことだ。いつも通り以外の、何物でもない。つまり、これは夢ではないということなのかもしれない。バスクラは、そんなに重くはなかった。

その時だった。

赤龍が、東海林の方へと視線を細めた。尻尾が、いつもより楽しげには揺れていなかった。

「せつかくのチャンスじゃったのに…」

赤龍は言った。

東海林はそれを聞くと、赤龍の方に視線を向けた。「あ、ああ…」と小さく東海林は赤龍に言った。

「だって…、よ」

東海林は言った。

後ろにいる香奈の方に、少しばかり視線を向ける。香奈は、もう既に人並みに吞まれて、東海林からは見えなくなりつつある。

それが、実際の現状、と言ったところか。

東海林は思った。

「まだ、な、」

もっと、心の準備が出来てから、だな。言った。

どこか、悲しげであって、それでいて、楽しげな口調だった。

それを聞いた赤龍は、目を丸くした。東海林がそんなことを言うとは、夢にも思っていなかったからだ。

「…随分冷静な判断をするのじゃな」

赤龍は言った。

聞いた東海林は、赤龍の方へと視線を細めた。

「それって、まるで俺がいつも冷静じゃないみたいじゃないか」
聞くと、赤龍はすぐに東海林に言った。

「？そうではないのか？」

聞いた東海林は、少しばかり視線を細めた。「お前な…」と小さく言った。

食堂の、東海林のいつものポジションに座ると、そこで譜面を広げる。東海林は赤龍に言いながら、譜面の整理をする。

「まあ、いいや」

東海林は言った。

それ以前に、まともな物の定義なんて、はっきりとしているわけではない。東海林は身を以て実感していた。

だから、東海林はそう言った。

これが、いつも通り。

つまり、いつも通りと言うことだ。

「…、うーむ…」

赤龍は小さく唸った。「東海林、やはりまだ、風邪が治りきっていないのではないだろうか？そんな事を言い出しおって」赤龍は言う。

「お前な…、はあ…」

東海林はわざとため息をした。

「あ！東海林！だからさつきも言ったじゃろ！赤龍の前でため息をする出ない、と」

聞いた東海林は、「お前がそんなこと言うからだ」と小さくぼやいた。

赤龍は少し膨れ、腕を組んで、翼の方を東海林に向けた。東海林はそれを見ると、どこかで微笑んで、マウスピースを啞えた。

バスクラから、滑らかな音が流れた。

夕食も、昨日のカップラーメンに比べたら、数段ましだった。と

言うか、それは東海林の夢の中だったのだが、東海林には、そんな風にしか見て取れなかった。みんなは、まるでそれが普通、と言わんばかりの顔で、昼食に見向きもせず、近くの友人と話している。「すごい」

それは、フランスパンにスープ、そしてピザと言う豪快な昼食だった。

それを見た赤龍は、「うまそう、じゃな…」と、指をくわえて見つめている。

そうだ、東海林は思った。これは東海林の夢の中ではない。だから、赤龍がみんなに見えるわけもない。つまり、赤龍の分が用意されているわけがないんだ。

思うと、東海林は赤龍に、少しばかり同情する。

「ほしいんだったら、俺の分、少し分けてやっても…」
言ったその瞬間だった。

その瞬間から、赤龍は東海林に抱き着いてくる。東海林は少しばかり、苦しくなってくる。

「礼を言うぞ！東海林！」

赤龍は叫ぶ。そもそも赤龍の声が聞こえる人物は少ない。見えるのが器と術師しかいないということは、声が聞こえるのもまた、器と術師だけだ。

東海林は思いながら、段々と脳の血の巡りが悪くなっていくことを実感する。

「分かったから、まずは俺の首から腕を…」

そう言った時だった。

「おー、シヨウジンは物好きだねー」

雄大が、東海林に言った。勿論雄大は赤龍が見える。つまり、東海林が首を絞められているということが、見えているはずだ。

思いながら、東海林は雄大に言った。

「物好きじゃ、ねえ…」

東海林は言いかけたが、段々と目の前がかすんでくるような、そ

んな感覚に見舞われる。

「…、」

青龍は沈黙する。ただ、東海林の言葉に耳を傾けるだけだ。ただそれだけだった。

「こんなところで抱き着かれるなんて、お前もすごいやつだな」

大介が、どこか物珍しそうに東海林に言った。確かにみんなの前で抱き着かれるのは初めてだ。だからと言って、東海林が赤龍に抱き着かれるのが好きと言うわけではない。そもそも、首が締まるのが好き、なんて奴は絶対にいない。東海林は思った。

「でも、東海林さん、顔色悪いですよ？」

そう言う問題じゃないと思うな！。

東海林は思いながら、目を回し始めていた。もう既に、ふらふらになりかけている。しかし赤龍は、未だに東海林に抱き着いている。

「東海林、もしかしてお前、そのままだと死ぬんじゃないか？」

和山が、東海林に言った。と言うか、まともにそんなことを言う友達はまずいない。東海林の頭の中では、そう考えられている。

「東海林！赤龍は東海林が、心の狭いやつじゃとずっと思っておった、しかしこれではつきりした！東海林は優しいやつじゃ」

遅すぎ、つてか苦しい…。

東海林は、ぶっ倒れそうな意識の中、赤龍の手を数回、軽く叩いた。赤龍は、「うむ？」と言いながら東海林の方へと視線を向ける。

東海林は、赤龍に小さく言った。

「…、…くる…、し…」

聞いた赤龍は、「うーむ…」とか言いながら、東海林の言ったことを考える。そして、納得する。

「うむ、分かったぞ！」

やっとか…。

東海林の思考が、そろそろ途切れそうだった。

赤龍は腕をほどいて、東海林の方へと視線を向ける。どこか輝いたその視線は、東海林には嫌な予感しか生まなかった。

夢のこともあるが、それだけではない。

そして、その胸騒ぎは的中する。

赤龍は、ピザを丸ごと一つ、東海林の分を一口で食べてしまった。

「…、」

言う言葉すらなかった。

でも、なんとなくではあるが、

「…うむ？どうしたのじゃ？」

赤龍は、不思議そうに東海林に聞いた。

東海林は若干目を細めながら、怒りを心の中へ押しとどめる。こ

う、赤龍に言った。

「…、いや、なんでもない…」

何でもあるが。

東海林は思いながら、辺りを見回す。あたりには、東海林の方を見て笑っている三人と二匹。青龍は、どこか俯き気味だったが、微妙に笑っていたような気もしなくはない。

なんとなくではあるが、これが、普通かな？とは思えた。

普通が一番、なんて言葉をよく聞くが、もしかしたら、東海林にはそれが当てはまることはないのかもしれない。

そもそも、龍がいる時点で、普通の領域なんてものを越えているのだから。

帰りのバスの中、東海林はバスに揺られていた。赤龍は、残っていた酔い止めを飲んで、バスの中で大介と楽しそうにゲームをしている。少しばかり東海林は、赤龍の方に視線を向ける。楽しそうな顔の横には、ランプがたくさん並んでいた。

「ジンじゃ！」

赤龍は言った。

聞いた東海林は、目を細めた。ジン・ラミーだ。東海林は、名前だけは聞いていたが、そんなマイナーなゲームを、こんなところで

するとは思っていなかった。と言うか、そんなゲーム、きっと誰もやらないだろ。

しかし、東海林はそれに、なんとなく安心した。

「くあ…、俺あと一枚でジンだったのに…」

言いながら、手札を補助席にぶちまける。大介の奥で座っている緑龍は、本の代わりに何かの映画を、ポータブルプレイヤーで見ている。何を見ているのかは分からないが、何かの子供向けのアニメと言うことは分かった。と言うか、何でそんなもの見てるんだ？と言う雰囲気だった。

後ろでは、ずっと音楽を聞きながら目を閉じている雄大と、腕を組んで目をつぶっている青龍がいる。前に耳を澄ませると、香奈と黄龍が、楽しそうに話をしている。「これから一緒に暮らすの？」と香奈が聞く。「ええ、そのつもり」と黄龍の大人びた声。

そうか、と東海林は思った。黄龍も、こつちの方で暮らすことにしたんだ。

思うが、もう特に、これと言った感情は浮かんでこなかった。それが、ある意味あたりまえな世界に、もう東海林はいるからだ。

思いながら、東海林は後ろの方に耳を向ける。

和山は、すつとかちゃかちゃと、バスの中でゲームしてる。そして、たまに「よし！」とか声を上げる。やっているゲームは、何のゲームか、そんなのは知らない。

しかし、東海林はよかった。

これで、全部が丸く収まった。そんな雰囲気、そこにはあった。東海林には、そこはかたない満足感で満たされていた。

ふと、

また東海林は、眠くなっていくのを感じた。もしかしたら、まだ風邪が残ってるのかもしれないな。

思いながら、東海林は自分の額に手を当てた。

熱は、あるようには思えない。

思うと、東海林はバスの車窓越しに、外の景色を眺める。そこに

あるのは、高速度道路と、きらきらと光る湖。どこなんだろうな。
東海林は思った。

東海林は、眠くなって行った。なんとなく、嫌な感覚を残しながら、東海林は目を半開きにして、背もたれに背中をべったりつける。もし今寝たら、また、変な夢を見るだろうか。

分からなかった。しかし、あれはあまり、面白い夢だとは言えない気がした。

東海林は目を閉じて、小さく吐息をついた。楽しそうな声だけが響いてきた。そして、意識が遠のいて行った。

今度は、いい夢でも見られるかな？

そう思った瞬間だった。

東海林は目を開けた。引っかかっているバッグから、リスの顔がのぞいていた。

光を放つ太陽は、どこか揺れ動くようにして、何かの雰囲気を含みながら、地上に光を注いでいた。それが、何を示唆しているのか、それは誰にも分からなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8839v/>

蒼空への扉.MDP

2011年10月6日23時54分発行